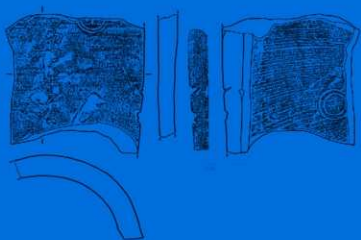


小原遺跡 (第22地点) 東前原遺跡 (第13地点)

区画道路6-38号外3路線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2018

水戸市教育委員会

小原遺跡
(第22地点)
東前原遺跡
(第13地点)

区画道路6-38号外3路線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市域の東側にある小原遺跡と東前原遺跡は、那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に位置しています。両遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」や、6世紀後半に築造された首長墓とみられる北屋敷古墳群、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

近年、小原遺跡と東前原遺跡が位置する東前町周辺は、東前第二土地区画整理事業の推進に伴い宅地化が急速に進んでおり、両遺跡の様相も大きく様変わりしてきております。埋蔵文化財は、その性格上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と原状に復すことができないため、現代を生きる私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世へと伝えていかなければならない貴重な国民共有の財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護・保存に努めているところです。

この度の小原遺跡と東前原遺跡内における発掘調査では、周辺において広がり方が確認されている奈良・平安時代の集落跡の一部が確認されたほか、近世の集落跡も検出されるなど、小原遺跡と東前原遺跡における古代及び近世の土地利用の変遷を復元するうえで貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書が、豊かな地域史の一端を復元することで貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

水戸市教育委員会
教育長 本 多 清 峰

例 言

- 1 本書は、水戸市東前町地内における区画道路6-38号外3路線道路改良及び造成並びに流域間連下水道工事に伴い実施された、小原遺跡第22地点と東前原遺跡第13地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、株式会社地域文化財研究所の調査支援を受け、水戸市教育委員会が主体となって行った。
- 3 遺跡の所在地及び面積、調査期間、担当者など調査体制は下記のとおりである。

所在地	小原遺跡（第22地点）茨城県水戸市東前町1072-1ほか 東前原遺跡（第13地点）茨城県水戸市東前町1103-1ほか
面積	小原遺跡（第22地点）232.5㎡ 東前原遺跡（第13地点）163㎡
調査期間	平成29年7月31日～平成29年8月30日
調査担当者	米川暢敬（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財埋蔵文化財センター主幹）
調査支援	小川将之（株式会社地域文化財研究所）
調査参加者	〔発掘調査〕 野村浩史・高安幸且・市毛祐一・齊藤宏光・角谷秀夫・高岡真士・川崎剛史・高久照美・小堤静江・高田幸江・石山 匠・斉藤周三 〔整理調査〕 野村浩史・川村理華・木村春代・藤井陽子・増田香理・小林真千子
調査主体者	本多清峰 水戸市教育委員会教育長
事務局	七字裕二 水戸市教育委員会事務局教育次長 白石嘉亮 水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長 関口慶久 同歴史文化財埋蔵文化財センター所長 米川暢敬 同主幹 新垣清貴 同主幹 丸山優香里 同埋蔵文化財専門員 松浦史明 同埋蔵文化財専門員（平成30年10月から） 染井千佳 同埋蔵文化財専門員 有田洋子 同嘱託員（公開活用担当） 昆 志穂 同嘱託員（庶務担当）

- 4 本書は、米川・小川が分担して執筆し、米川の助言・指導に基づいて小川が編集した。文責は文末に記した。
- 5 調査記録類及び出土品は、一括して水戸市大串貝塚ふれあい公園埋蔵文化財センターにて保管・管理している。
- 6 調査においては下記の方々にご指導・ご協力を賜った。（順不同・敬称略）
茨城県教育庁文化課 東前地区開発事務所
出澤和雄 出澤秀行

凡 例

- 1 本書は、小原遺跡第22地点と東前原遺跡第13地点の調査成果を取録した。グリッド番号及び遺構番号については遺跡ごとに付した。
- 2 調査において使用した略号は以下のとおりである。

小原遺跡第22地点…201183-022

東前原遺跡第13地点…201259-013

S I：堅穴建物跡 S B：掘立柱建物跡 P i t：柱穴・ピット S K：土坑



S D：溝跡 P：堅穴建物跡内柱穴・掘立柱建物跡柱穴

K：植栽痕・攪乱等 T P：テストピット

- 3 測量は、国家標準直角座標Ⅸ系（日本測地系）に基づいた。遺構実測図中の方位は座標北を示し、土層断面図及び断面図に記した数値はそれぞれ標高を示す。
- 4 遺構の計測は壁上端を基準に行った。主軸方向はカマドを通る中軸線とし、土坑などは長軸線を軸線に、座標北に対して何度偏斜するかを記載した。深度は検出面からの深さである。
- 5 遺構の土層及び遺物の色調表現は『新版標準土色帖2003年版』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）に準拠した。土層説明の中で含有量は2%以下を「微量」、3～10%を「少量」、11～20%を「中量」、21%以上を「多量」と記した。いずれも同書の「面積割合」を参照している。
- 6 出土遺物観察表の計測値は、（ ）が復元値、〈 〉が残存値を示す。単位はcmである。
- 7 出土遺物の集計は、接合後各遺構ごとに約1cm四方以上の遺物に対して行った。その際、1/2以上残存するものを個体とし、それ以外を破片とした。なお、同一個体とみられるが接合関係のないものは全て破片として扱った。
- 8 掲載遺物には、遺構ごとに番号が付されており、本文・挿図・図版共に一致している。
- 9 表紙に使用した図は、小原遺跡第22地点出土の丸瓦（SI04-12）である。
- 10 本書に用いた基本的な挿図縮尺及び線種・網掛け・ドットは下記のとおりである。

挿図縮尺 遺構：全体図…1：200 堅穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑…1：60
溝跡…1：80 堅穴建物跡カマド…1：30
遺物：土器、陶磁器…1：3、1：4 石製品…1：3、1：4 鉄製品…1：3

線種・網掛け 遺構想定線 … ---- 床面硬化範囲 … ----

掘立柱建物跡の硬化面 …  カマド構築土（粘土）範囲 … 

攪乱・木根 … K …  掘り方 … （濃度50%）… 

黒色処理範囲 …  須恵器（断面）… 

ドット 遺物 … ●

目 次

本文目次

ごあいさつ

例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の方法と経過 1

(1) 発掘調査の方法と経過 1 (2) 整理調査の方法と経過 2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 3

第2節 歴史的環境 3

第3節 小原遺跡と東原遺跡における既往の調査 6

第4節 基本層序 8

第3章 小原遺跡第22地点の調査成果

第1節 調査の概要 9

第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物 10

(1) 竪穴建物跡 10 (2) 土坑 19

(3) ビット 20

第3節 近世の遺構 20

(1) 掘立柱建物跡 20 (2) 土坑 25

(3) ビット 26

第4章 東原遺跡第13地点の調査成果

第1節 調査の概要 29

第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物 30

(1) 竪穴建物跡 30 (2) 土坑 34

(3) ビット 35

第3節 近世の遺構と遺物 36

(1) 溝跡 36 (2) 土坑 37

第4節 遺構外出土遺物 37

第5章 総括

第1節 小原遺跡第22地点 41

(1) 土地利用の変遷 41 (2) SI04出土の文字瓦 42

第2節 東原遺跡第13地点 43

写真図版

抄録

挿図目次

第 1 図	道跡の位置及び周辺の 道跡位置図…………… 4	第 13 図	SI04 (2)…………… 18	第 28 図	SI02 出土遺物…………… 34
第 2 図	東前原道跡・小原道跡 における既往の調査 地点…………… 6	第 14 図	SI04 出土遺物…………… 19	第 29 図	SK02…………… 34
第 3 図	基本層序…………… 8	第 15 図	SK02…………… 20	第 30 図	SK03…………… 35
小原道跡第 22 地点		第 16 図	SK03…………… 20	第 31 図	SK04…………… 35
第 4 図	小原道跡第 22 地点 全体図…………… 9	第 17 図	SB01・05…………… 21	第 32 図	SD01…………… 36
第 5 図	SI01 (1)…………… 10	第 18 図	SB02…………… 22	第 33 図	SD01 出土遺物…………… 37
第 6 図	SI01 (2)…………… 11	第 19 図	SB03・06…………… 23	第 34 図	SK01…………… 37
第 7 図	SI01 出土遺物…………… 12	第 20 図	SB04…………… 24	第 35 図	遺構外出土遺物…………… 38
第 8 図	SI02…………… 13	第 21 図	SB07…………… 25	第 36 図	小原道跡第 22 地点 奈良・平安時代遺構 変遷図…………… 41
第 9 図	SI02 出土遺物…………… 14	第 22 図	SK01…………… 25	第 37 図	小原道跡第 22 地点 近世遺構図…………… 42
第 10 図	SI03…………… 15	東前原道跡第 13 地点		第 38 図	小原道跡第 22 地点 SI04 出土文字瓦写真… 42
第 11 図	SI03 出土遺物…………… 16	第 23 図	東前原道跡第 13 地点 全体図…………… 29	第 39 図	東前原道跡第 13 地点 遺構変遷図…………… 43
第 12 図	SI04 (1)…………… 17	第 24 図	SI01…………… 30		
		第 25 図	SI01 出土遺物 (1) …… 31		
		第 26 図	SI01 出土遺物 (2) …… 32		
		第 27 図	SI02…………… 33		

表目次

第 1 表	周辺の道跡一覧…………… 5	第 5 表	SB01 ビット一覧表…………… 21	第 12 表	近世ビット一覧表…………… 26
第 2 表	東前原道跡における 既往の調査一覧…………… 7	第 6 表	SB05 ビット一覧表…………… 21	第 13 表	出土遺物観察表…………… 26
第 3 表	小原道跡における 既往の調査一覧…………… 7	第 7 表	SB02 ビット一覧表…………… 22	第 14 表	出土遺物一覧表…………… 28
小原道跡第 22 地点		第 8 表	SB03 ビット一覧表…………… 23	東前原道跡第 13 地点	
第 4 表	奈良・平安時代ビット 一覧表…………… 20	第 9 表	SB06 ビット一覧表…………… 23	第 15 表	ビット一覧表…………… 35
		第 10 表	SB04 ビット一覧表…………… 24	第 16 表	出土遺物観察表…………… 38
		第 11 表	SB07 ビット一覧表…………… 25	第 17 表	出土遺物一覧表…………… 40

写真図版目次

小原道跡第 22 地点		同 No.12 文字瓦出土状況 近景		同土層断面	
図版 1	調査区全景 (1) 調査区全景 (2)	図版 4	SI04 No.14 鉄製品 (鎌) 出土状況近景	図版 8	SI01 遺物出土状況 同遺物出土状況近景 SI02 全景 同カマド近景 同土層断面 同遺物出土状況 同カマド掘り方近景 SK02 全景
図版 2	基本層序 SI01 全景 同カマド土層断面 同遺物出土状況 同 No.8 鉄線出土状況近景 SI02 全景 同カマド遺物出土状況 同カマド土層断面		SK02 全景 SK03 全景 同土層断面 SB01・05・07 全景 SB03・04・06 全景 SK01 全景 同土層断面	図版 9	SK02 土層断面 SK03 全景 同土層断面 SD01 全景 同土層断面 (1) 同土層断面 (2) 同遺物出土状況 SK01 全景
図版 3	SI02 遺物出土状況 SI03 全景 同土層断面 同 No.8 土製品 (紡錘車) 出土状況近景 SI04 全景 同土層断面 同遺物出土状況	図版 5	SI01・02・03 (1) 出土 遺物	図版 10	SI01・02 (1) 出土遺物
		図版 6	SI03 (2)・04 出土遺物	図版 11	SI02 (2)、SD01、 遺構外出土遺物
		東前原道跡第 13 地点			
		図版 7	調査区全景 基本層序 SI01 全景 同カマド近景		

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成29年2月10日付け及び平成29年4月1日付けで、土地区画整理事業に伴い、水戸市長（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱、以下「事業者」という）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」が提出された。

市教委はこの照会文書に対し、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」及び「東前原遺跡」に該当していること、試掘調査の実施が必要であること、文化財保護法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を茨城県教育委員会教育長（以下「県教委」という）あて提出する必要がある旨回答した（教理第143号及び教理第289号）。その後、平成29年3月22日～3月24日の期間に両遺跡において試掘調査を実施したところ、両遺跡から遺構・遺物が確認され、小原遺跡を第22地点、東前原遺跡第13地点として整理した。

両地点は区画整理事業に伴う道路部分になるため、本件は「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」原則Ⅲ「恒久的な構造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当すると判断された。そのため、市教委は、現状保存に向け事業者と協議を重ねたが、工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。市教委は、事業者から提出のあった「埋蔵文化財発掘の通知」に、記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して県教委教育長あて達達した（平成29年4月4日付け教理第145号及び平成29年4月1日付け教理第291号）。この通知に対し、県教委教育長から平成29年4月13日付け文第93号及び文第105号にて、それぞれの遺跡について工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果、重要な遺構が確認された場合にはその保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、市教委は工事対象地のうち、小原遺跡については埋蔵文化財が確認された面積232.5㎡を、東前原遺跡については埋蔵文化財が確認された面積163㎡を調査対象とし、平成29年7月31日～平成29年8月30日の期間に株式会社地域文化財研究所の支援を受けて記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。（米川）

第2節 調査の方法と経過

（1）発掘調査の方法と経過

発掘調査は、小原遺跡第22地点と東前原遺跡第13地点の2遺跡を対象とした。

発掘調査は、現況写真の撮影、重機による表土除去、遺構確認、遺構の掘り下げの順に進め、各段階を記録した。公共座標を基に小原遺跡第22地点ではX軸 = 37440.00m、Y軸 = 62570.00m、東前原第13地点ではX軸 = 37615.00m、Y軸 = 62675.00mの交わる地点を基点として5×5mの方眼グリッドを設定した。その原点は北西隅である。グリッドはX軸をアルファベット、Y軸を算用数字で標示した（第4・23図）。

遺構の実測は、10cm間隔の等高線による1:100縮尺の全体図、各遺構ごとに1:10・1:20縮尺の平面図・土層断面図・断面図を作成した。

遺構覆土の掘り下げにあたっては、堅穴建物跡は土層観察用ベルトを用いて四分割し、掘立柱建物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

跡は柱痕を確認し、土坑・ピット共に二分割した。

出土遺物は原位置での記録を基本とした。細片遺物については区（カマド右袖部がある部分を1区として時計回りに2・3・4区）を設け、層位ごとに取り上げた。

写真撮影は、35mmのモノクロ、カラーリバーサルフィルムを用いて行い、その補助としてデジタルカメラを用いた。さらに必要に応じて、中判カメラによる撮影を実施している。

発掘調査は、平成29年7月31日、小原遺跡第22地点より着手した。8月1日には表土除去が終了し、2日から遺構確認を実施した。3日、基準点設置後に遺構配置図を作成し、遺構の調査を開始した。8月17日、機材を撤収し現場調査を終了した。

東前原遺跡第13地点は、8月18日に表土除去を開始し、22日から遺構確認を実施した。23日、基準点設置後に遺構配置図を作成し、遺構の調査を開始した。30日、調査を終了し、同日機材を撤収し現場調査を終了した。

(2) 整理調査の方法と経過

整理調査は、出土した遺物を全て水洗いし、注記は可能な限り行った。注記記号は凡例で示した略号を用いて、遺跡名・遺構・出土位置・出土年月日の順で記載した。なお、遺物の全量は収納箱7箱分である。遺物の接合にはセメダインCを用い、実測及び写真撮影に耐えられないものについてはエキボシ樹脂で補強した。遺物は全て分類し、種別や個体・破片ごとの点数を数え、出土遺物一覧表(第14・17表)に集計した。

掲載遺物は遺構に伴うものを基本にして、小原遺跡第22地点は44点、東前原遺跡第13地点は37点を抽出している。遺物実測は全て原寸で行い、トレースはロットリングを使用して版下を作成した。遺物は報告書に使用した番号で統一し、報告書使用と未使用に分け、内容を明記したうえでコンテナに収納した。

遺構図面は台帳を作成し、図面修正については第2原図を作成して行い、その後のデジタルトレースを経て報告書用に編集した。

遺構写真は、撮影内容・方向・日付などを記載のうえ、台帳を作成してアルバムに収納した。

整理調査は、8月31日より遺物の水洗いを開始し、注記、接合、分類、集計、実測遺物の抽出、台帳作成、実測、トレースと進め、デジタルカメラでの写真撮影後に編集した。9月には各図面と写真の整理を行い、遺構図面のデジタルトレースを開始した。11月にはDTPソフトウェアを用いて報告書の編集を開始し、翌年3月に報告書が刊行となった。

(小川)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、関東平野の北東部、茨城県のはば中央に位置する。市域の北部には、西から東へ流れる那珂川とその支流により形成される沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。その下流域右岸の大半が水戸市域となる那珂川は、栃木県的那須連山を水源として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋へと流れ出る。この那珂川の存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが水上交通によって結ばれることから、歴史的に水戸市域は交通の要衝地となることが多かった。

東前原遺跡及び小原遺跡は、東茨城台地の北東部をなす水戸台地の東側縁辺、標高約19mのところろに位置しており、東前原遺跡は東西約690m、南北約310m、小原遺跡は東西約500m、南北約1kmの範囲に展開する。この一帯は明治18(1885)年には広範囲にわたり松林が広がっていたが、近年では土地区画整理事業に伴い、大規模な土地改変が行われ、宅地化が急速に進んでいる。

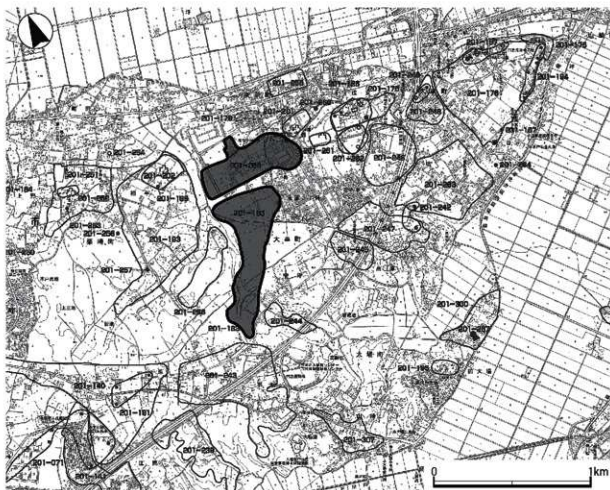
第2節 歴史的環境

東前原遺跡及び小原遺跡が立地する東茨城台地、特に東端部には、縄文から近世に至るまで、数多くの遺跡が密集している(第1図)。ここでは両遺跡の周辺に分布する遺跡群とそれらを取り巻く歴史的環境を概観する。

東前原遺跡及び小原遺跡周辺における人々の営みの歴史は先土器時代にまで遡る。当該期の資料は、東前原遺跡と石川川を挟んだ対岸に位置する森戸古墳群からの出土例が知られているのみである。森戸古墳群では、第12号墳(大六天古墳)の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。それら石器群の大部分は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土であるが、剥片であるものの、1点が周溝底面のローム中から出土している(伊東 1976)。これらの資料のほか、明確に遺跡としてくられた範囲内での採集ではないが、水戸市百合が丘、下入野町地内などにおいて、ガラス製黒色デイスイトや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている(川口 2005, 2008)。

縄文時代の遺跡としては、第一に挙げるべきは大車貝塚であろう。大車貝塚は「常陸國風土記」那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国指定となっているが、その名に恥じぬ豊富な出土資料は、質・量ともに茨城県下における当該期の貝塚を凌駕している(川崎・吹野 1986, 井上・金子 1996)。また、下畑遺跡では、加曾利E式、大木8b式期の堅穴住居跡をはじめとする遺構群が確認されており(井上 1985)、複式炉を有する住居跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる。

弥生時代については、東前原遺跡及び小原遺跡周辺における状況も水戸市全域における傾向に違わず、生活の痕跡は他時期のそれに比べてやや低調な傾向にある。しかしながら、後期に至っては、丘陵沿いの台地上や縁辺部に立地する小原遺跡(本遺跡)、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物の採集や出土が報告されており、これらの調査成果の蓄積により、徐々にではあるが、水戸市域における弥生時代の土地利用の様相が像を結びつつある。



第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡位置図 (1:25,000)

古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群などを筆頭に、古墳が活発に築造されるようになる。これらの古墳のうち、北屋敷古墳群第2号墳では発掘調査が実施されており、円筒埴輪、武人をはじめとする人物埴輪、馬形埴輪など形象埴輪が多く出土した(井上 1995)。このうち、ほぼ全身が出土した武人埴輪は水戸市指定文化財となっている。集落の分布としては、中期の集落に係る資料に乏しく、周辺では管見に触れないが、前期の集落としては大串遺跡(井上 1994)、後期の集落としては梶内遺跡(櫻村 1995)などの調査事例がある。当該台地上においては、前期・後期ともに活発な土地利用がみてとれる反面、中期における土地利用が緩慢であると言わざるを得ない。このことは集落展開の動態について、中期において相応の変動があったことを示唆するものである。

奈良・平安時代となり、律令制下の中央政権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及び郡寺の造営が、渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において行われ、律令体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は全城が常陸国那賀郡域内にあり、当該遺跡周辺は同郡芳賀里(郷)に比定される(中山 1979)。当該時期の遺跡として、先ず注目すべきは大串遺跡の存在である。大串遺跡第7地点における発掘調査では、断面V字状を呈する大型の溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されている。また、東柱をもち、壺地業を有する桁行6間×梁行3間の大型の掘立柱建物跡なども発見され、一般集落とは大きく異なる様相を示している。大型の掘立柱建物柱抜き取り穴からは多量の炭化材と共に炭化米が、区画溝からは

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
201-175	大串貝塚	貝塚	縄文土器(前、後)、石製品、貝刀、釣針、網突具	
201-176	大串遺跡	集落跡	縄文土器(前、後)、土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平) 布目瓦、灰輪陶器	
201-183	小原遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)	本遺跡
201-186	金山塚古墳群	古墳群	円筒埴輪、鉄鏝、刀子	前方後円(1)、円3(5)
201-193	上平遺跡	集落跡	土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)、墨書土器	
201-201	椿山館跡	城館跡		
201-202	和平館跡	城館跡		
201-244	源助前遺跡	集落跡	土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)	
201-245	沢幡遺跡	集落跡	土師器(奈、平)、須恵器(奈、平)、墨書土器、円面硯、紡錘車、砥石、鉄鏝、鉄鎌	
201-246	梶内遺跡	集落跡	土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)、刀子、円面硯、墨書土器、陶器、古銭、鎌	
201-247	高塚遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(奈、平)、須恵器(奈、平)、土師質土器、埴管	
201-248	北屋敷遺跡	集落跡	土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)、瓦、陶器	
201-249	北屋敷古墳群	古墳群	形象埴輪、直刀、小刀、鉄鏝	円1(2)
201-258	行雄遺跡	集落跡	土師器(奈、平)、須恵器(奈、平)	
201-259	東前原遺跡	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古、奈、平)、須恵器(奈、平)	本遺跡
201-260	住吉神社古墳	古墳		
201-261	大串原館跡	城館跡		
201-262	大串原遺跡	集落跡	縄文土器(前)、石製品、土師器(奈、平)、須恵器(奈、平)	
201-263	宮前遺跡	集落跡	土師器(奈、平)、須恵器(奈、平)	

炭化した額桶や穀桶が出土しており、これらの建物が正倉としての性格を有し、火災により焼失していたことが明らかになっている。また、「厨」銘墨書土器も出土するなど、官衙的色彩の強さが目立つ遺構・遺物群から、本遺跡は那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている(小川・大淵ほか 2008)。

このほか、梶内遺跡は、7世紀から10世紀まで、途中希薄になる時期は存在するものの、比較的長く継続する集落跡として注視すべき遺跡である。当該遺跡では、「舎人」「長」や里(郷)名を記したとみられる「芳」銘墨書土器、9点もの円面硯を出土しており、官衙関連遺跡としての性格を匂わせる(櫻村 1995)。以上のような遺跡群の集中する様は、「常陸國風土記」那賀郡条の「平津驛家西一二里有岡名曰大櫛」の記事(秋本 1958)とあわせ、東前原遺跡とその周辺地域が常陸国那賀郡芳賀里(郷)の中核ともいえる地域であったことを物語っている。

武士が実権を握る中世に旧常澄村城と重なる恒富郷を根拠としていたのは、常陸平氏大掾氏の一流である石川氏であった(常澄村史編さん委員会編 1989)。東前原遺跡周辺の当該時期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく、その詳細については不明点が多い(水戸市教育委員会 1999)。

近世において、当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言えない。しかしながら、当該時期に帰属する溝跡や土坑などは各所で散見され、その土地利用の痕跡を窺うことはできる。なかでも、『新編常陸国誌』などに立原伊豆守の居所と記されている伊豆屋敷跡では、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている(井上 1998)。

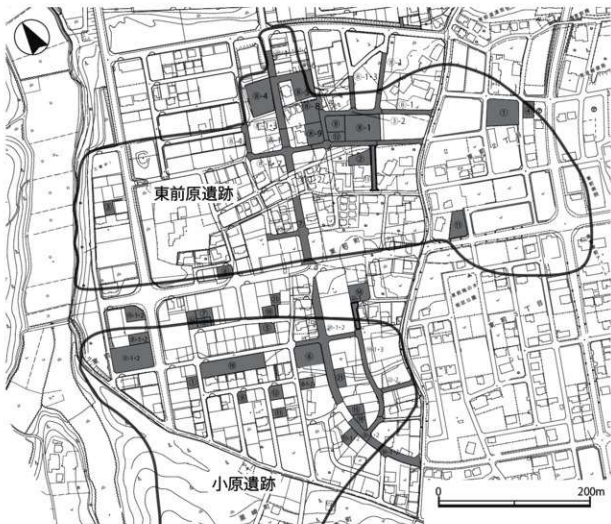
以上のように、東前原遺跡及び小原遺跡が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまで、豊富な遺跡が所在している。古代には、大串遺跡や梶内遺跡などの官衙関連遺跡が展開をみせ、古代常陸国那賀郡の中核であった台渡里官衙遺跡群との色濃い関連性は疑うべくもない。現在、東前原遺跡及び小原遺跡周辺における調査の蓄積には目覚ましいものがある。これらの調査成果の丹念な検討から、当該地域の歴史像が結ばれていくことが期される。

第3節 小原遺跡と東前原遺跡における既往の調査

東前原遺跡における発掘調査は、平成20(2008)年の第1地点の試掘調査から始まり、今次調査地点を含めて現時点において、計13地点において行われている(第2図、第2表)。これらの半数は個人住宅建築に伴う調査面積が狭小な試掘調査であるが、近年の土地区画整理事業に伴う市道敷設範囲や整地予定地では、9地点において記録保存を目的とした本発掘調査を実施しており、そのほぼ全ての調査区で濃密な埋蔵文化財の分布を確認している。

第3地点(第2次)、第7地点(第2次)、第8地点(第2次・第3次・第4次・第5次・第7次・第8次)、第10地点の調査成果によると、堅穴建物跡や掘立柱建物跡、溝跡などが検出され、8世紀前葉から集落の形成が始まり、8世紀後葉から9世紀後葉に土地利用が最も活発化する傾向がみられる(米川・太田・小川・大淵ほか 2015、小野・鈴木・米川・丸山 2016、橋本・小川・大淵ほか 2016、米川・太田・谷ほか 2016、米川・高野・丸山・昆 2016、米川・丸山・高野 2016、河野・萩原・昆・米川 2017、高野・米川・丸山 2017、水野・米川・丸山 2017)。また、第8地点(第3次・第4次・第5次・第7次)では、後続する10世紀前葉から11世紀前葉頃の堅穴建物跡なども検出されている。

東前原遺跡の南側に展開する小原遺跡における発掘調査は、今次調査地点を含めて現時点では、計22地点において行われている(第2図、第3表)。本発掘調査では、第3地点(第2次)、第16地点(第



第2図 東前原遺跡・小原遺跡における既往の調査地点(1:5,000)

第3節 小原遺跡と東前原遺跡における既往の調査

2次)などの本発掘調査事例があり(太田・染井・土生 2015, 齋藤・米川 2016), 東前原遺跡と同様, 竪穴建物跡や掘立柱建物跡, 溝跡などが検出されているが, 東前原遺跡に先行する7世紀後葉から集落の形成が始まるものの, 9世紀中葉以降は集落の形成が途絶える点で様相が異なっている。

これらの本発掘調査の成果から, 両遺跡は一時その営みが確認されない時期もあるものの, 古墳終末期～平安時代中葉にかけて土地利用が展開した比較的規模の大きい一連の集落遺跡であることは明白である。また, 中～近世の遺構も点在しており長期間に亘って土地利用がなされてきた遺跡である。

(米川)

第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧

地点	次数	種別	調査年月日	調査箇所	調査原因	遺構	遺物
1	1	試	平成20年11月11日	東前2丁目57・60	個人住宅建築	—	○
2	1	試	平成24年2月2日	東前第二土地区画50街区8	個人住宅建築	—	—
3	1	試	平成26年5月8日～5月6日	東前第二土地区画6-17・18・20・21号線(部分)	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成27年2月9日～3月10日	東前第二土地区画18・6・20・21号線	土地区画整理事業	○	○
4	試	平成26年7月30日	東前2丁目61・62	個人住宅建築	—	○	
5	試	平成27年1月22日	東前第二土地区画75街区15	個人住宅建築	—	—	
6	試	平成27年4月28日	東前第二土地区画33街区2	個人住宅建築	○	○	
7	1	試	平成27年5月8日	東前町1124-1～1126	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成28年3月28日～4月22日	東前第二土地区画43街区22(部分)	土地区画整理事業	○	○
8	1	試	平成27年6月16日～6月19日	東前第二土地区画6-22・31号線(部分), 同48街区3・4, 同6-2・22・31号線部分	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成27年12月22日～平成28年1月20日	東前第二土地区画10-2号線(部分)	土地区画整理事業	○	○
9	1	試	平成28年3月1日～4月6日	東前第二土地区画42街区3・8・18・20 他6-27号線の一部	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成28年3月8日～5月16日	東前第二土地区画43街区32・37・39・41・42・43・44・45	土地区画整理事業	○	○
10	1	試	平成28年5月25日～7月7日	東前第二土地区画43街区5・28・38・40・36 他39の一部	土地区画整理事業	○	○
	2	立	平成28年7月12日	東前第二土地区画6-22号線(部分)	土地区画整理事業	○	○
11	1	試	平成28年12月25日～平成29年1月7日	東前第二土地区画43街区9, 同6-17号線(部分)	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成29年6月7日～7月26日	東前第二土地区画43街区22(部分)	土地区画整理事業	○	○
12	1	試	平成29年7月20日～8月26日	東前第二土地区画43街区22(部分)	農業用倉庫建築	○	○
	2	試	平成27年7月15日	東前第二土地区画48街区6・7	個人住宅建築	—	—
13	1	試	平成28年8月19日	東前第二土地区画6-33号線(部分)	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成28年11月10日～12月28日	東前町2-42-2～4	宅地造成	○	○
14	1	試	平成28年9月2日	東前町2-42-2～4	宅地造成	○	○
	2	本	平成29年3月24日	東前第二土地区画48街区8	個人住宅建築	○	○
15	1	試	平成29年5月11日～6月2日	東前第二土地区画48街区8	個人住宅建築	○	○
	2	本	平成29年3月24日	東前第二土地区画6-25号線	土地区画整理事業	○	○
16	1	試	平成29年8月18日～8月30日	東前第二土地区画6-25号線	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成29年8月18日～8月30日	東前第二土地区画6-25号線	土地区画整理事業	○	○

第3表 小原遺跡における既往の調査一覧

地点	次数	種別	調査年月日	調査箇所	調査原因	遺構	遺物
1	1	試	平成24年6月19日	東前町1049-4	個人住宅建築	—	—
2	1	試	平成26年3月4日	東前町1150-3	個人住宅建築	—	—
3	1	試	平成26年6月13・19日	東前町1056-1065	道路整備	○	○
	2	本	平成27年1月26日	東前町1056-1065	道路整備	○	○
4	1	試	平成26年7月30日	東前第二土地区画整理事業73街区2・3・6	集合住宅建築	○	○
	2	本	平成27年5月14日	東前第二土地区画整理事業73街区2・3・6	個人住宅建築	○	○
5	1	試	平成26年10月22日	東前第二土地区画整理事業66街区20	個人住宅建築	—	—
6	1	試	平成27年4月23日	東前第二土地区画整理事業62街区3・4・5	共同住宅建築	○	○
7	1	試	平成27年6月3日	東前町1150-2・4	個人住宅建築	○	○
8	1	試	平成27年7月8日	東前第二土地区画整理事業73街区1・5	土地鑑定	○	○
	2	本	平成28年12月14日	東前町1167-3(旧地番)	個人住宅建築	○	○
9	1	試	平成27年7月14日	東前第二土地区画整理事業69街区1	土地鑑定	—	○
10	1	試	平成27年8月21日	東前第二土地区画整理事業67街区1・2	老人ホーム建築	○	○

第2章 遺跡の位置と環境

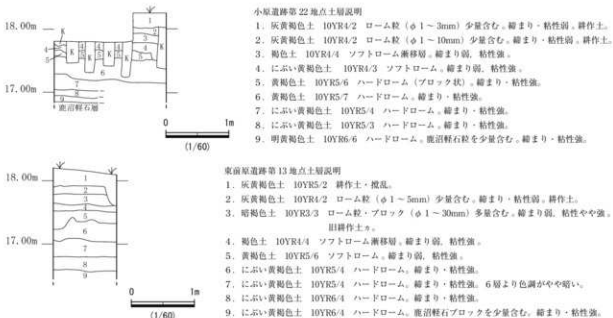
11	試	平成27年10月15日	東前町字原 1042、1055	個人住宅建築	—	—	
12	試	平成27年11月10日	東前町第二土地区画整理事業 73 街区 7	賃貸住宅建築	—	—	
13	試	平成27年11月25日	東前町第二土地区画整理事業 73 街区 7	土地鑑定	○	○	
14	試	平成27年12月1日	東前町 1150-1	個人住宅建築	—	○	
15	試	平成28年2月3日	東前町第二土地区画整理事業保留地 56 街区 9	個人住宅建築	—	—	
16	1	試	平成28年5月12日	東前町 1064 の一部、1065 の一部、1029-8 の一部	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成28年7月25日	東前町 1064 の一部、1065 の一部、1029-8 の一部	土地区画整理事業	○	○
17	1	試	平成28年5月13日	東前町 1060 番、1062 番 1	個人住宅建築	○	○
	2	本	平成28年5月31日	東前町 1060 番、1062 番 1	個人住宅建築	○	○
18	1	試	平成28年7月21日	東前町 1062 番 1	個人住宅建築	○	○
	2	本	平成28年10月4日	東前町 1062 番 1	個人住宅建築	○	○
19	1	試	平成28年8月16日	東前町 1038-1、1039-1、1060、1064、1065、1067-1、1072-1、1073、1074-1・2、1135-1	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成28年11月11日	東前町 1073 外 13 番	土地区画整理事業	○	○
20	1	試	平成28年12月15日	東前町 1055・1056 の各一部	個人住宅建築	○	○
	2	本	平成29年2月7日	東前町 1055・1056 の各一部	個人住宅建築	○	○
21	試	平成29年3月10日	東前町 1062-3 (東前第二土地区画整理事業 56 街区 12)	個人住宅建築	○	○	
22	1	試	平成29年3月22日	東前町 1072-1、1072-2、1072-3 の一部	土地区画整理事業	○	○
	2	本	平成29年7月31日	東前町 1072-1、1072-2、1072-3 の一部	土地区画整理事業	○	○

第4節 基本層序

小原遺跡第22地点では、3層のソフトローム漸移層まで耕作されており、遺構検出面は3層ソフトローム漸移層上面となった。4層は立川ローム層のⅢ層に相当すると考えられる。5層のハードロームはブロック状であり、プライマリな堆積ではないと考えられる。9層が鹿沼軽石層への漸移層である。

東前原遺跡第13地点では、第2次世界大戦時の防空壕が、調査区中央より北側に存在する可能性を指摘されたため、慎重に表土除去を行った。その結果、深さ2mを超える埋め戻された攪乱が確認されたが、防空壕にあたるのかは判断できなかった。耕作は4層のソフトローム漸移層まで及んでいたため、遺構検出面は4層上面となった。5層は立川ローム層のⅢ層に相当すると考えられる。

なお、両調査地点において、ローム層暗色帯とAT(始良Tn火山灰)層は確認されなかった。(小川)

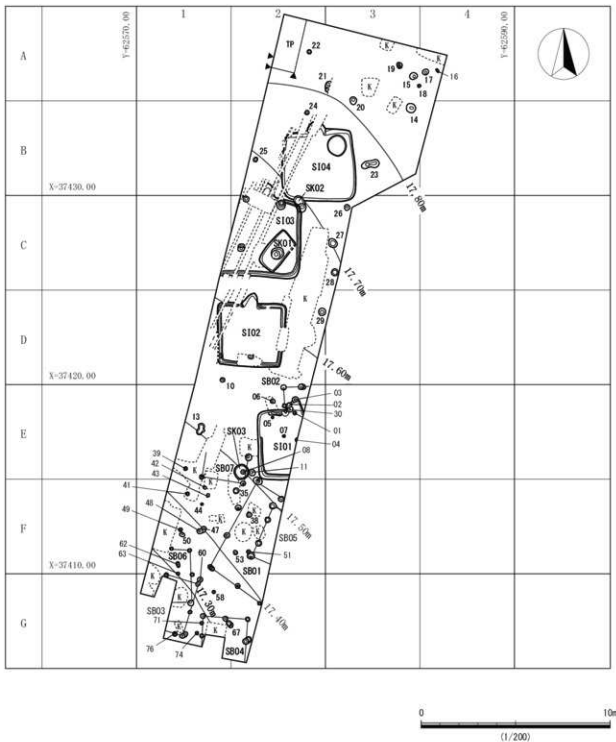


第3図 基本層序

第3章 小原遺跡第22地点の調査成果

第1節 調査の概要

奈良・平安時代では8世紀後半～9世紀中頃の竪穴建物跡4軒、土坑2基、ピット16基、近世では掘立柱建物跡7棟、土坑1基、ピット33基を調査した。



第4図 小原遺跡第22地点全体図

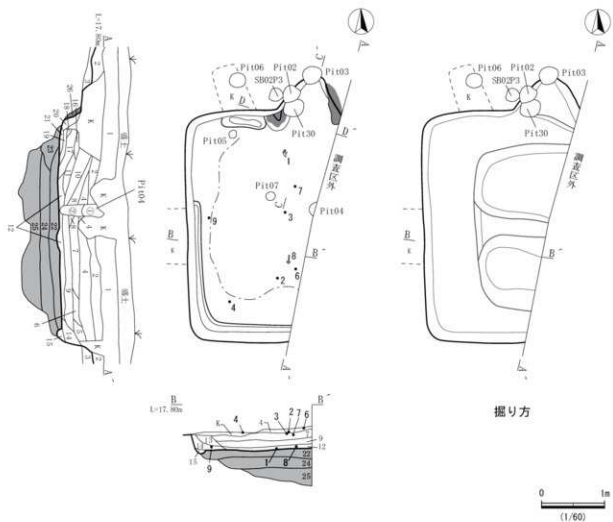
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

SI01 (第5～7図, 第13・14表, 図版2・5)

検出位置はE2グリッドで、東側は調査区外となる。Pi101～05・07・30と重複し、本遺構が古い。平面形は方形と考えられ、主軸方向はN-0°を示す。規模は東西軸が2.47 m以上、南北軸が3.65 m、深さ0.35 mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝は幅0.10～0.20 m、深さ0.03～0.08 mで北西部を除いて存在する。柱穴は検出されなかった。掘り方は遺構中心部に向かって深く、最深部で0.63 mを測り、粗く掘り下げた後、ロームブロックを多量に含んだ褐色土・黄褐色土・にぶい黄褐色土の貼り床を施し、平坦な床面を構築している。床面はほぼ全域が硬化していた。カマドは北壁中央に設置され、袖は黄褐色粘土を用いて構築されている。煙道部は屋外へ0.64 m掘り込み、燃烧部幅は0.68 mである。火床の被熱の痕跡は認められず、右袖部は残存していない。

遺物は土師器51点、須恵器27点、鉄製品2点、縄文時代の凹石を二次利用したと考えられる砥石1点が出土した。土師器は煮沸具主体、須恵器は供膳具主体である。時期は出土遺物から8世紀後半～末と考えられる。



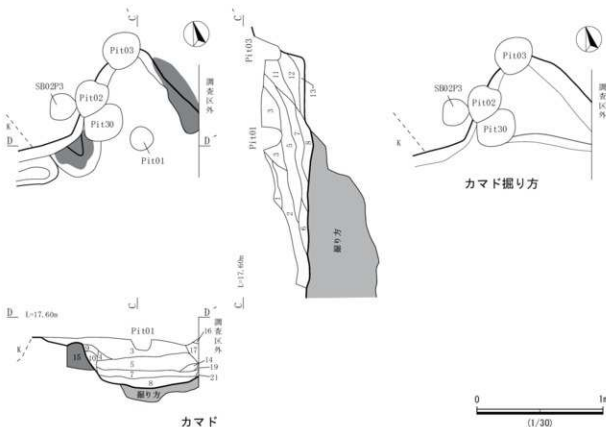
第5図 SI01 (1)

S101 土層説明

1. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
 2. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
 3. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 多量含む。塊状。締まり弱。粘性強。
 4. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 少量。焼土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 微量含む。締まり強。粘性弱。
 5. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性弱。
 6. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性弱。
 7. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性弱。
 8. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性弱。
 9. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり強。粘性弱。
 10. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。
 11. 灰黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。
 12. 灰黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 微量含む。締まり弱に強・粘性強。
 13. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量含む。粘性強。
 14. 灰黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。
 15. 褐色土 10YR4/4 ローム粒 ($\phi 1\sim 15\text{mm}$) 多量含む。締まり弱。粘性強。
 16. 黄褐色土 2.5Y5/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 少量。焼土粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 微量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。
 17. 黄褐色土 2.5Y5/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 少量。焼土粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 微量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。
 18. 黄褐色土 2.5Y5/4 ローム粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量。焼土粒・ブロック ($\phi 1\sim 30\text{mm}$) 少量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。
 19. 黄褐色土 2.5Y5/4 ローム粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 微量。焼土粒・ブロック ($\phi 1\sim 30\text{mm}$) 多量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性強。
 20. 黄褐色粘土 2.5Y5/3 締まり・粘性弱に強。
 21. 灰黄褐色土 2.5Y6/3 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量。焼土粒 ($\phi 1\sim 15\text{mm}$) 少量。黄褐色粘土粒・ブロック ($\phi 1\sim 30\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。
 22. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロック ($\phi 1\sim 80\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。振り方。
 23. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロック ($\phi 1\sim 30\text{mm}$) 多量。焼土粒・ブロック ($\phi 1\sim 30\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性強。振り方。
 24. 灰黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック ($\phi 1\sim 50\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。振り方。
 25. 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ブロック ($\phi 1\sim 90\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。振り方。
 26. 黄褐色粘土 2.5Y5/3 締まり・粘性強。振り方。
- ※ 16～21 はカマド。

P101 土層説明

- ① 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 少量。締まり・粘性弱。
- ② 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒 ($\phi 1\sim 5\text{mm}$) 少量。締まり・粘性弱。

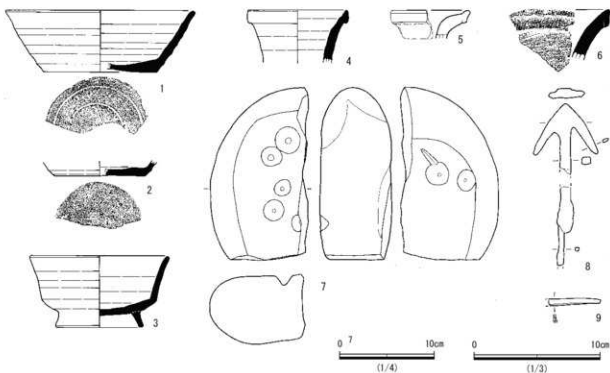


第6図 S101 (2)

第3章 小原遺跡第22地点の調査成果

カマド土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~5mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
2. にぶい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒 (φ1~10mm) 少量, 焼土粒 (φ1~10mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
3. 黄褐色土 2.5Y5/3 ローム粒 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~5mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
4. 黄褐色土 2.5Y5/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
5. 黄褐色土 2.5Y5/4 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒・ブロック (φ1~30mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
6. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (φ1~20mm) 多量, 焼土粒 (φ1~5mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり弱, 粘性強。
7. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~20mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 微量含む。締まり弱, 粘性強。
8. にぶい黄色土 2.5Y6/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~15mm) 少量, 黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。
9. にぶい赤褐色土 2.5YR4/3 焼熟黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱, 粘性弱。
10. にぶい黄色土 2.5Y6/3 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり・粘性強。
11. 黄褐色土 2.5Y5/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~10mm) 中量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
12. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 焼土粒 (φ1~10mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり・粘性弱。
13. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量, 焼土粒 (φ1~15mm) 中量, 黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり弱, 粘性強。
14. 黄褐色粘土 2.5Y5/3 締まり・粘性特に強。
15. 黄褐色粘土 2.5Y5/3 焼土粒 (φ1~3mm) 少量。締まり・粘性強。

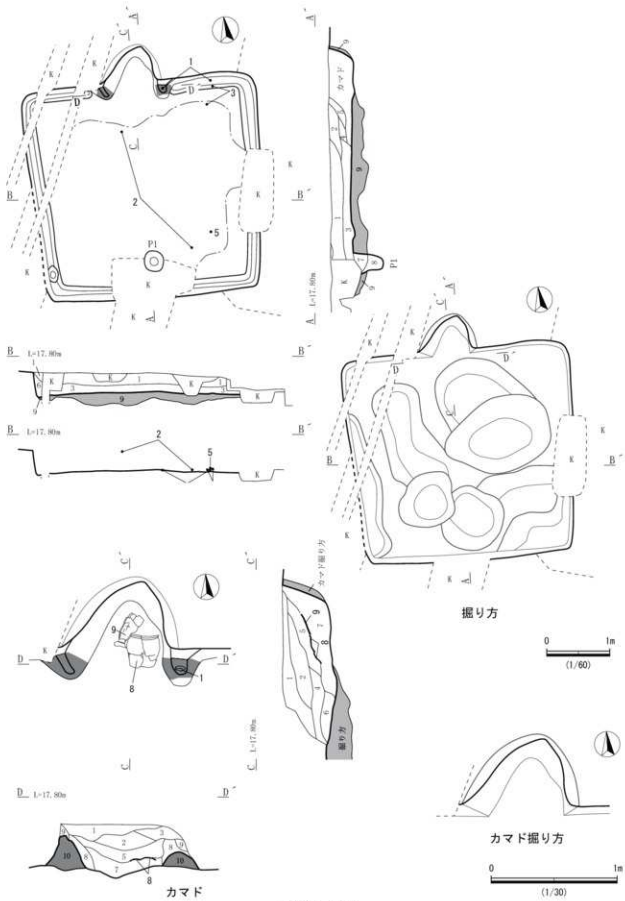


第7図 S101 出土遺物

S102 (第8・9図, 第13・14表, 図版2・3・5)

検出位置はD1・2グリッドである。耕作による攪乱を多く受けている。平面形は方形で、主軸方向はN-0°を示す。規模は東西軸が3.65m, 南北軸が3.34m, 深さ0.33mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝は幅0.19~0.24m, 深さ0.02~0.04mで全周する。ピットは南壁中央寄りに出入口施設に伴うと考えられるP1が検出されたほかは認められない。規模は長軸0.29m, 短軸0.19mの楕円形で、深さは0.45mである。掘り方は全体を粗く掘り下げた後、ロームブロックを多量に含んだにぶい黄褐色土の貼り床を施し、平坦な床面を構築している。床面はほぼ全域が硬化していた。カマドは北壁中央に設置されている。煙道部は屋外へ0.60m掘り込み、燃焼部幅は0.79mである。火床の被熱の痕跡は認められない。袖部は灰黄褐色粘土を用いて構築されている。

遺物は土師器196点, 須恵器56点, 石製品は砥石1点が出土した。土師器は供膳具と煮沸具, 須恵器は供膳具主体である。時期は出土遺物から9世紀中頃と考えられる。



第8図 S102

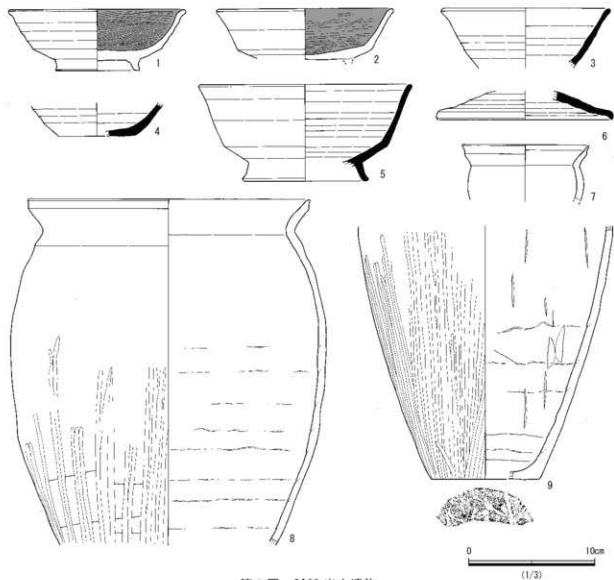
第3章 小原道跡第22地点の調査成果

S102土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~10mm) 多量。黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
3. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
4. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量。黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性強。
5. 灰黄褐色土 10YR1/2 ローム粒 (φ1~15mm) 多量。黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり・粘性強。
6. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
7. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
8. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
9. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・ブロック (φ1~60mm) 多量含む。締まりやや強、粘性強。割り方。

カマド土層説明

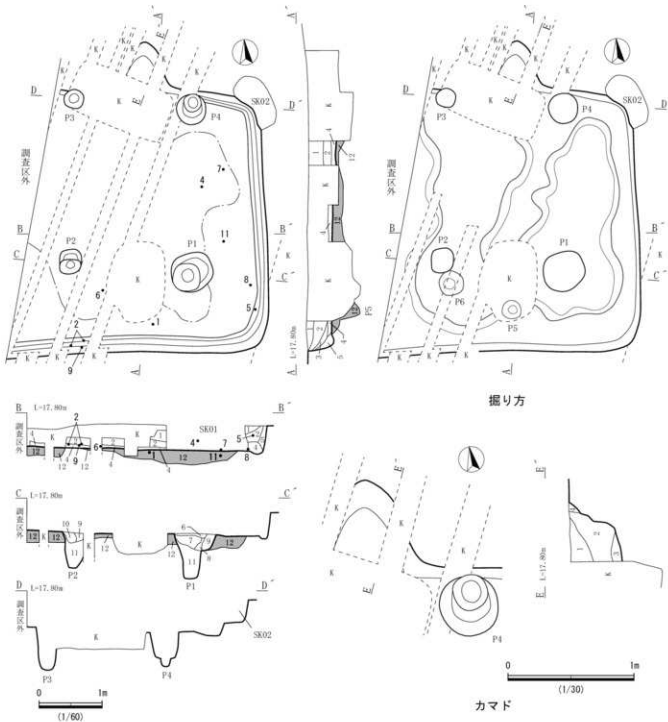
1. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 ローム粒・ブロック (φ1~25mm) 少量。焼土粒 (φ1~5mm) 微量。灰黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり・粘性強。
2. 褐色土 10YR4/4 ローム粒 (φ1~3mm) 少量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。灰黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり・粘性強。
3. 黄褐色土 2.5Y5/4 ローム粒 (φ1~3mm) 少量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~25mm) 多量含む。締まり・粘性強。
4. 褐色土 10YR4/4 ローム粒 (φ1~10mm) 微量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。灰黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
5. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~25mm) 多量含む。締まり・粘性強。
6. オリーブ褐色土 2.5Y4/4 ローム粒 (φ1~3mm) 微量。焼土粒 (φ1~5mm) 微量。灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり・粘性強。
7. 黒褐色土 7.5YR3/2 ローム粒 (φ1~15mm) 微量。焼土粒 (φ1~15mm) 中量。灰黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
8. 黄褐色土 2.5Y5/4 ローム粒 (φ1~3mm) 微量。焼土粒 (φ1~5mm) 微量。灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。
9. 暗灰黄色土 2.5Y4/2 ローム粒 (φ1~3mm) 多量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。灰黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。
10. 灰黄褐色粘土 10YR6/2 締まり・粘性強。



第9図 S102出土遺物

S103 (第10・11図, 第13・14表, 図版3・5・6)

検出位置はB2, C1・2グリッドで, 西側は調査区外となる。耕作による擾乱を多く受けている。SK02と重複し, 本遺構が古い。また近世以降のSK01が本遺構の覆土中に構築されている。平面形は方形と考えられ, 主軸方向はN-3°-Eを示す。規模は東西軸が4.18m以上, 南北軸が4.24m, 深さ0.41mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝は幅0.19~0.32m, 深さ0.02~0.05mでほぼ全周する。柱穴は主柱穴4基と掘り方で2基検出された。規模はP1が長軸0.70m, 短軸0.60m, 深さ0.72m, P2が長軸0.38m, 短軸0.25m, 深さ0.56m, P3が長軸0.20m, 短軸0.18m, 深さ0.63m, P4が長軸0.50m, 短軸0.40m, 深さ0.63m, P5が長軸0.20m, 短軸0.18m, 深さ0.63m, P6が長軸0.20m, 短軸0.18m, 深さ0.63m



第10図 S103

第3章 小原遺跡第22地点の調査成果

m, 短軸0.48 m, 深さ0.55 mである。掘り方は全体を粗く掘り下げた後、ロームブロックを多量に含んだにぶい黄褐色土の貼り床を施し、平坦な床面を構築している。床面はほぼ全域が硬化していた。カマドは北壁中央に設置されおり、攪乱により袖部が失われている。煙道部は屋外へ0.63 m掘り込み、燃焼部幅は0.52 m以上である。火床の被熱の痕跡は認められない。

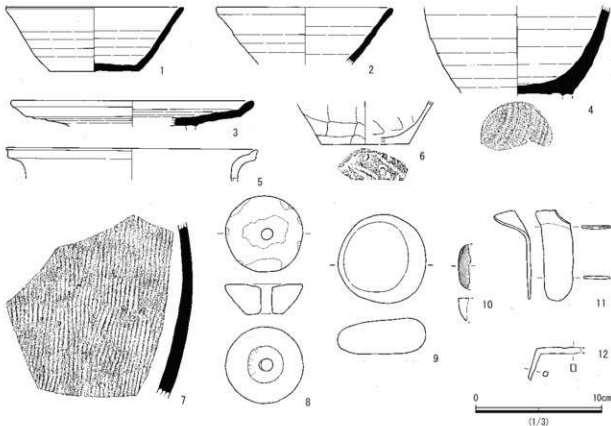
遺物は土師器136点, 須恵器51点, 土製品は紡錘車1点, 石製品は砥石1点・不明品1点, 鉄製品はへら状工具1点・鏝1点が出土した。土師器は煮沸具主体, 須恵器は供膳具主体である。時期は出土遺物から9世紀前半と考えられる。

S103土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。
2. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ブロック (φ1~25mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
3. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
4. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性強。
5. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
6. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性強。
7. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり・粘性強。
8. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり弱。粘性強。
9. 褐色土 10YR4/4 ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
10. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。粘性弱。
11. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
12. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~80mm) 多量含む。締まり・粘性強。掘り方。

カマド土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR6/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。炭化物粒 (φ1~5mm) 少量。黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり・粘性強。
2. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (φ1~10mm) 少量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
3. にぶい黄褐色土 10YR6/4 ローム粒 (φ1~3mm) 少量。焼土粒 (φ1~15mm) 少量。黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
4. にぶい黄褐色土 10YR6/4 ローム粒 (φ1~5mm) 多量。焼土粒 (φ1~3mm) 微量。黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり・粘性強。

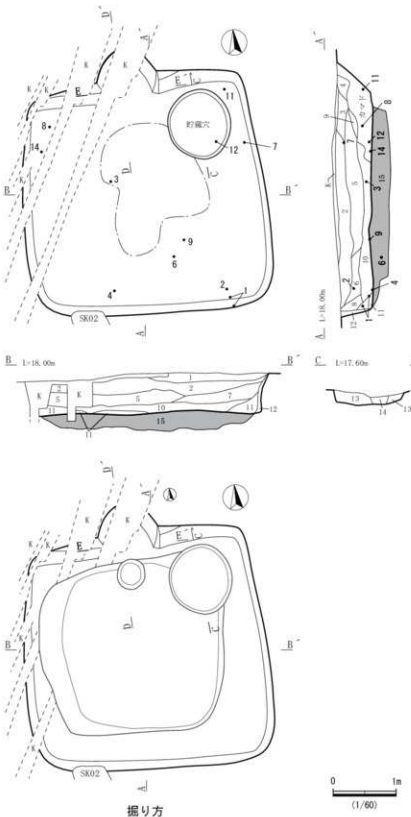


第11図 S103出土遺物

S104 (第12～14図, 第13・14表, 図版3・4・6)

検出位置はB2・3, C2・3グリッドである。西側が耕作による攪乱を多く受けている。SK02と重複し、本遺構が古い。平面形は方形で、主軸方向はN-0°を示す。規模は東西軸が3.90m, 南北軸

が3.82m, 深さ0.62mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝と柱穴は検出されなかった。掘り方は全体を粗く掘り下げた後、ロームブロックを多量に含んだ黄褐色土の貼り床を施し、平坦な床面を構築している。床面は遺構中央部が硬化していた。カマドは北壁中央に設置されている。煙道部は屋外へ0.43m掘り込み、燃焼部幅は0.73mである。火床の被熱の痕跡は認められず、軸部は失われている。遺構北東角付近では貯蔵穴が確認された。規模は長軸1.08m, 短軸1.00m, 深さ0.22mである。



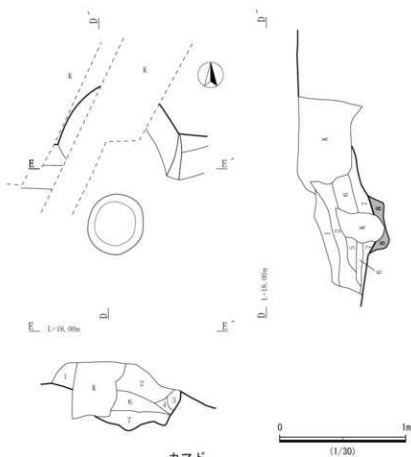
第12図 S104 (1)

遺物は土師器277点, 須恵器94点, 瓦2点, 鉄製品は鎌1点, 石製品は砥石1点が出土した。土師器は煮沸具, 須恵器は供膳具主体である。丸瓦の破片が覆土中から出土している。凸面に二重円の押印と、焼成前にへら状工具により記された「□(鳥カ)取部羊フ万カ」の6文字であろうへら書きがあり、凹面にも凸面と同じ二重円の押印が認められる。時期は出土遺物から8世紀後半～末と考えられる。

第3章 小原道跡第22地点の調査成果

S104土層説明

1. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~5mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり強, 粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ブロック (φ1~100mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
3. 灰黄褐色土 10YR1/2 ローム粒・ブロック (φ1~25mm) 中量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 灰黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
4. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~5mm) 少量, 灰黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 少量, 締まり弱, 粘性強。
5. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。
6. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 灰黄褐色土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
7. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~20mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量含む。締まり・粘性強。
8. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 多量, 焼土粒 (φ1~10mm) 微量含む。締まり・粘性強。
9. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 灰黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性強。
10. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒 (φ1~5mm) 微量, 灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~30mm) 少量含む。締まり・粘性強。
11. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
12. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
13. にくい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~50mm) 多量, 焼土粒 (φ1~10mm) 少量, 黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~50mm) 少量含む。締まり弱, 粘性強。
14. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 焼土粒・ブロック (φ1~30mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
15. 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒・ブロック (φ1~70mm) 多量, 灰黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~60mm) 少量, 黒褐色土粒・ブロック (φ1~50mm) 微量含む。締まり・粘性強。傾り方。

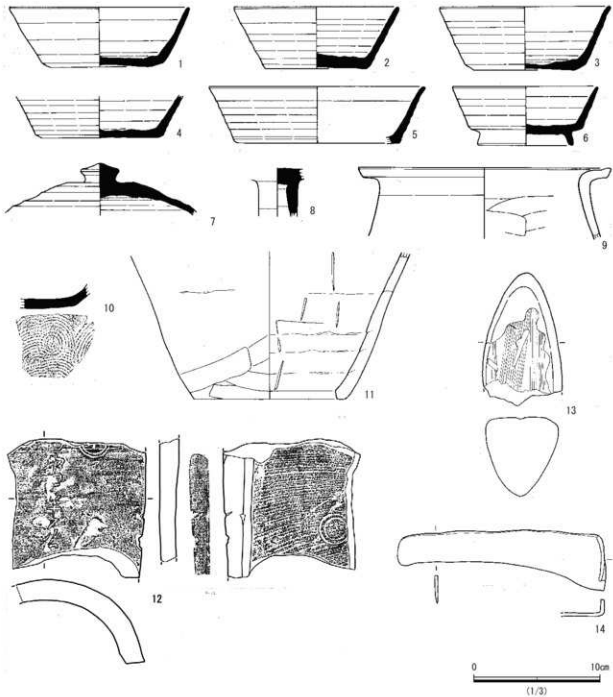


カマド

カマド土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり・粘性強。
2. にくい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒 (φ1~15mm) 微量, 焼土粒 (φ1~15mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性強。
3. にくい黄褐色土 10YR6/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性特に強。
4. にくい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
5. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~10mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
6. にくい黄色土 2.5Y6/4 焼土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~50mm) 多量含む。締まり・粘性特に強。
7. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒 (φ1~15mm) 多量, 黄褐色粘土粒 (φ1~15mm) 中量, 締まり弱, 粘性強。
8. にくい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 微量含む。締まり・粘性弱。傾り方。

第13図 S104 (2)



第14図 S104出土遺物

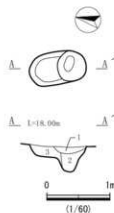
(2) 土坑

SK02 (第15図, 第14表, 図版4)

検出位置はC2グリッドである。S103・04と重複し、本遺構が新しい。平面は楕円形で、底面に段をもつ。規模は長軸0.92m、短軸が0.54m、深さ0.37mを測り、長軸方向はN-22°-Wを示す。覆土は自然堆積である。遺物は土師器7点、須恵器1点が出土したが、細片のため図示できなかった。時期は覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。

SK03 (第16図, 図版4)

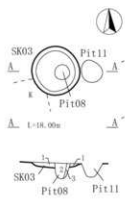
検出位置はE2グリッドである。SB07, Pit08と重複し、本遺構が古い。平面は円形で、規模は直径0.75m、深さ0.06mを測る。覆土はロームブロックを多く含み、埋め戻しと考えられる。遺物は出土していない。時期は覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。



SK02 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2
ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。
締まり・粘性弱。
2. 暗褐色土 10YR3/3
ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。
締まり・粘性弱。
3. 暗褐色土 10YR3/3
ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。
締まり・粘性弱。

第15図 SK02



SK03 Pit08 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2
ローム粒・ブロック (φ1~25mm)
多量含む。締まり・粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/1
ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。
締まり弱、粘性強。
3. にぶい黄褐色土 10YR4/3
ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。
締まり弱、粘性強。

第16図 SK03

(3) ビット

Pit14~29 (第4・14表)

ビットは16基確認し、建物跡になる可能性を考えその復元に努めたが、建物跡の把握には至らなかった。遺物は、Pit14から須恵器片1点、Pit15から土師器片1点・須恵器片1点が出土したものの、細片のため図示できなかった。

第4表 奈良・平安時代ビット一覧表

() は残存値 単位=m

No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
位置	B3	A3	A4	A4	A3・4	A3	AB・3	A3	A2	B3	B2	B2	C3	C3	C3	D2
長軸	0.50	0.40	0.20	0.35	0.15	0.34	0.40	0.60	0.23	0.95	0.24	0.25	0.30	0.50	0.38	0.40
短軸	0.50	0.34	0.11	0.30	0.15	0.28	0.35	(0.25)	0.23	0.40	0.22	0.21	0.28	0.42	0.35	0.35
深さ	0.66	0.37	0.17	0.23	0.23	0.27	0.43	0.44	0.14	0.22	0.33	0.14	0.51	0.32	0.32	0.33
遺物	有	有														

第3節 近世の遺構

(1) 掘立柱建物跡

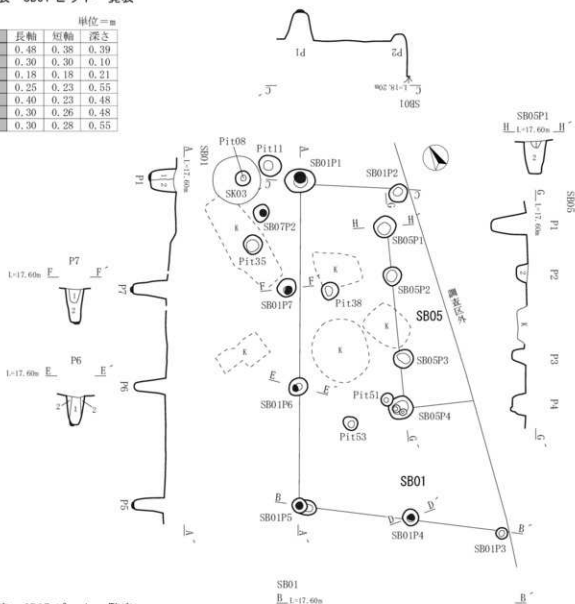
SB01 (第17図, 第5表, 図版4)

F1・2, G1・2グリッドに位置し、東側は調査区外である。SB05と重複するが、新旧関係は不明である。なお周囲に存在するビットも本遺構に伴う可能性がある。建物跡は掘立柱構造で、平面規格は桁行3間、梁行2間以上である。桁行長5.00m (約16.5尺)、梁行長3.20m (約10.5尺)以上を計測し、面積は16㎡となる。建物の傾きはN-30°-Eを示す。柱穴は7基確認した。平面は円形及び楕円形である。規模は長軸0.18~0.48m、短軸0.18~0.38m、深さは0.10~0.55mである。P1・4~7で直径0.10~0.20mの柱痕跡が確認された。柱痕跡あるいは柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が1.50m、P3~P4間が1.50m、P4~P5間が1.70m、P5~P6間が1.90m、P6~P7間が1.50m。

P7～P1間が1.70mである。覆土は黒褐色土である。遺物は出土していない。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。

第5表 SB01 ピット一覧表

単位=ｍ			
No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.48	0.38	0.39
P2	0.30	0.30	0.10
P3	0.18	0.18	0.21
P4	0.25	0.23	0.55
P5	0.40	0.23	0.48
P6	0.30	0.26	0.48
P7	0.30	0.28	0.55



第6表 SB05 ピット一覧表

単位=ｍ			
No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.35	0.35	0.55
P2	0.30	0.28	0.17
P3	0.32	0.30	0.20
P4	0.40	0.35	0.22

SB01・05 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒(φ1～5mm)少量含む。締まり弱。粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒(φ1～15mm)多量含む。締まり弱。粘性やや強。
3. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒(φ1～20mm)多量含む。締まり弱。粘性やや強。

第17図 SB01・05

SB05 (第17図, 第6・14表, 図版4)

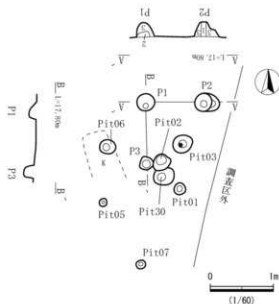
F2グリッドに位置し、東側は調査区外である。柱穴を4基確認するとどまったが、掘立柱建物跡の可能性があるので本節で扱った。SB01と重複するが、新旧関係は不明である。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。建物の傾きはN-20°-Eを示す。柱穴の平面は円形である。規模は長軸0.30~0.40m、短軸0.28~0.35m、深さは0.17~0.55mである。柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が0.80m、P2~P3間が1.30m、P3~P4間が0.80mである。覆土は黒褐色土である。遺物は、二次的混入である奈良・平安時代の土師器甕片2点が出土した。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の様相から近世の可能性が高いと判断した。

SB02 (第18図, 第7表)

E2グリッドに位置し、東側は調査区外である。柱穴を3基確認するとどまったが、掘立柱建物跡である可能性があるため本節で扱った。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。これらのピットでSI01の覆土中に位置するものがある。建物の傾きは南北を軸とした場合N-6°-Wを示す。柱穴の平面は円形である。規模は長軸0.20~0.40m、短軸0.18~0.28m、深さは0.15~0.25mで、P2の土層では柱痕跡(1層)が確認された。柱痕跡あるいは柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が1.00m、P1~P3間が1.00mである。覆土は黒褐色土と褐色土である。遺物は出土していない。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。

第7表 SB02 ピット一覧表

単位=m			
No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.28	0.28	0.22
P2	0.40	0.28	0.25
P3	0.20	0.18	0.15



SB02 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/1 ローム状 (φ1~3mm) 少量含む。粘り・粘性弱。柱痕跡。
2. 黒褐色土 10YR3/2 ローム状 (φ1~10mm) 多量含む。粘り・粘性弱。
3. 褐色土 10YR4/6 ローム状・ブロック (φ1~25mm) 多量含む。粘り・粘性弱。

第18図 SB02

SB03 (第19図, 第8表, 図版4)

G1グリッドに位置し、西側は調査区外である。SB06と重複するが、新旧関係は不明である。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。建物跡は欄干構造で、平面規格は桁行2間、梁行1間以上である。桁行長2.80m (約9.2尺)、梁行長1.80m (約5.9尺)以上を計測し、面積は5.0㎡となる。建物の傾きはN-19°-Eを示す。柱穴は4基確認した。平面は円形及び楕円形である。規模は長軸0.20~0.28m、短軸0.18~0.22m、深さは0.10~0.28mである。柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が1.80m、P2~P3間が1.50m、P3~P4間が1.30mである。遺物は出土していない。覆土は黒褐色土である。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。

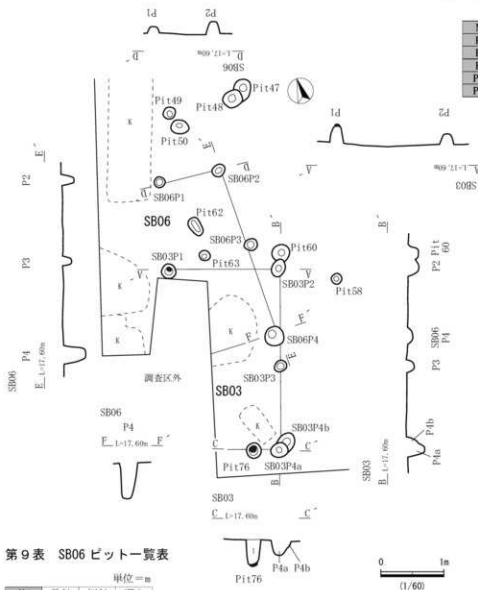
SB06 (第19図, 第9表, 図版4)

F・G1 グリッドに位置し、西・南側は調査区外である。SB03と重複するが、新旧関係は不明である。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。建物跡は鋼柱構造で、平面規格は桁行2間、梁行1間以上である。桁行長2.80m (約9.2尺)、梁行長0.90m (約2.9尺) 以上を計測し、面積は2.5㎡となる。建物の傾きはN-0°を示す。柱穴は4基確認した。平面は円形である。規模は長軸0.16~0.30m、短軸0.16~0.30m、深さは0.11~0.55mである。柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が0.90m、P2~P3間が1.30m、P3~P4間が1.50mである。覆土は黒褐色土である。遺物は出土していない。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。

第8表 SB03 ピット一覧表

() は残存値 単位=m

No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.24	0.22	0.28
P2	0.28	0.20	0.17
P3	0.20	0.18	0.10
P4a	0.28	0.22	0.26
P4b	0.25	(0.20)	0.14



第9表 SB06 ピット一覧表

単位=m

No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.16	0.16	0.11
P2	0.20	0.18	0.20
P3	0.20	0.18	0.12
P4	0.30	0.30	0.55

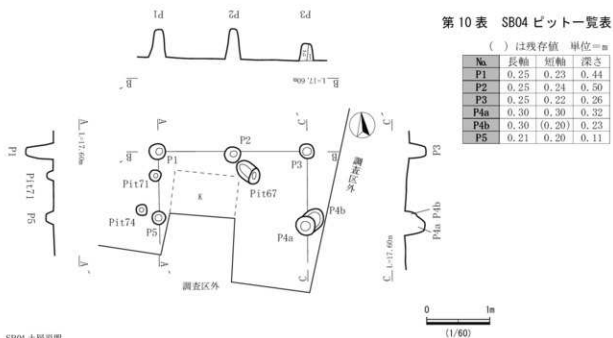
SB03 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。餅まわり弱。粘性やや強。

第19図 SB03・06

SB04 (第20図, 第10表, 図版4)

G1・2グリッドに位置し、南側は調査区外である。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。建物跡は銅柱構造で、平面規格は桁行1間以上、梁行2間である。桁行長2.40m(約7.9尺)以上、梁行長1.20m(約3.9尺)を計測し、面積は2.9㎡となる。建物の傾きはN-5°-Eを示す。柱穴は5基確認した。平面は円形である。規模は長軸0.21~0.30m、短軸0.20~0.30m、深さは0.11~0.50mである。柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が1.20m、P2~P3間が1.20m、P3~P4間が1.20m、P5~P1間が1.10mである。覆土は黒褐色土である。遺物は出土していない。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。



SB04 土層説明
 1. 黒褐色土 IOYR3/2 ローム粒(φ1~5mm)少量含む。締まり・粘性弱。
 2. 黒褐色土 IOYR3/2 ローム粒(φ1~15mm)多量含む。締まり弱、粘性やや強。

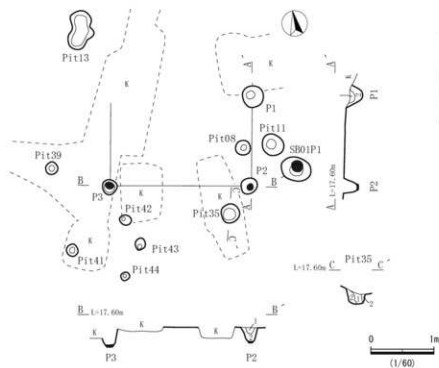
第20図 SB04

SB07 (第21図, 第11表, 図版4)

E1・2, F1・2グリッドに位置する。柱穴を3基確認するにとどまったが、掘立柱建物跡である可能性があるため本節で扱った。SK03と重複し、本遺構が新しい。なお周囲に存在するピットも本遺構に伴う可能性がある。建物の傾きは南北を軸とした場合N-12°-Eを示す。柱穴の平面は円形である。規模は長軸0.23~0.35m、短軸0.23~0.33m、深さは0.23~0.25mである。柱痕跡あるいは柱穴中央を基準とした柱間寸法はP1~P2間が1.40m、P2~P3間が2.20mである。覆土は黒褐色土である。遺物は出土していない。帰属する時代を明確に示す資料は得られなかったが、覆土の状態から近世の可能性が高いと判断した。

第11表 SB07ピット一覧表

単位=m			
No.	長軸	短軸	深さ
P1	0.35	0.33	0.23
P2	0.28	0.25	0.23
P3	0.23	0.23	0.25



SB07. Pit35 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり弱、粘性やや強。

第21図 SB07

(2) 土坑

SK01 (第22図, 図版4)

検出位置はC2グリッドである。SI03と重複し、本遺構が新しい。平面は長方形で、規模は長軸2.12m、短軸が1.15m、深さ0.40mを測る。長軸方向はN-41°-Eを示す。覆土は埋め戻しと考えられる。遺物は、二次的の混入である奈良・平安時代の土師器35点、須恵器16点が出土した。時期は覆土の状態で近世以降と考えられる。



SK01 土層説明

1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。糜文状。締まり弱、粘性強。
2. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。糜文状。締まり弱、粘性強。
3. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱、粘性強。

第22図 SK01

(3) ビット

Pit01～08・10・11・13・30・35・38・39・41～44・47～51・53・58・60・62・63・67・71・74・76 (第12・14表)

ビットは33基確認した。SB01～07が位置する調査区南側に多く分布している。これらのビットも建物跡になる可能性を考えたその復元に努めたが、建物跡の把握には至らなかった。なお掘立柱建物跡のビットに変更したものは、欠番となっている。出土した遺物は、いずれも二次的混入の奈良・平安時代ものである。(小川)

第12表 近世ビット一覧表

() は残存値 単位=mm

No.	01	02	03	04	05	06	07	08	10	11	13	30	35	38	39	41	42
位置	E2	E2	E2	E2	E2	E2	E2	E2	D1	E2	E1	E2	F2	F2	E1	F1	F1
長軸	0.19	0.27	0.30	0.20	0.13	0.25	0.15	0.25	0.25	0.35	0.60	0.34	0.30	0.27	0.20	0.20	0.18
短軸	0.19	0.25	0.25	(0.07)	0.12	0.23	0.15	0.25	0.23	0.30	0.35	(0.25)	0.28	0.25	0.20	0.16	0.15
深さ	0.15	0.30	0.23	0.35	0.13	0.34	0.14	0.25	0.44	0.45	0.37	0.46	0.39	0.37	0.12	0.29	0.13
遺物	有	有					有		有		有						

No.	43	44	47	48	49	50	51	53	58	60	62	63	67	71	74	76
位置	F1	F1	F1	F1	F1	F1	F2	F2	G1	G1	F1	GF・1	G1	G1	G1	G1
長軸	0.19	0.13	0.35	0.30	0.20	0.30	0.20	0.25	0.16	0.28	0.33	0.17	0.43	0.18	0.16	0.24
短軸	0.15	0.13	(0.23)	0.26	0.18	0.22	0.18	0.20	0.16	(0.23)	0.19	0.17	0.27	0.18	0.16	0.24
深さ	0.23	0.17	0.25	0.27	0.82	0.14	0.11	0.16	0.13	0.14	0.22	0.13	0.19	0.20	0.05	0.38
遺物																

第13表 出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	出土位置
S101	1	須恵器 杯	(14.8) 4.9 (9.0)	1/5存、ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ後ナデ。縁割あり。	白色粒、黒色粒	灰白色S17/1	還元 堅焼	床土2cm 試掘と 接合
	2	須恵器 杯	— (1.2) (2.0)	体部下端～底部片、ロクロ成形。底部は手持ちヘラケズリ後ナデ。縁割あり。	白色粒・黒色粒多、 チャート、白色針状物少	灰色S5/1	還元 堅焼	床土 25cm
	3	須恵器 高台付杯	(10.8) 5.6 7.0	1/3存、ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けロクロナデ。	白色粒多、黒色粒、 白色針状物、砂礫少	褐色7.5YR5/1	還元 堅焼	床土 20cm
	4	須恵器 意	— (7.7) (4.2)	ロ線部片、ロクロ成形。	白色粒・砂粒多、 雲母、白色針状物	灰色7.5Y5/1	還元 堅焼	床土 28cm
	5	土師器 壺	— (2.2)	ロ線部片。ロ線部は外面がヨコナデ。	白色粒、雲母	にぶい褐色5YR6/4	普通	2区下層
	6	須恵器 椀	— (4.0)	ロ線部片。ロ線部は外面が平行タキ後ヨコナデ。内面がロクロナデ。	白色粒、砂粒、 黒色粒多	灰色S4/1	還元 堅焼	床土 32cm
	7	石製品 砥石	—	全長:18.2cm 幅:10.4cm 厚さ:7.4cm 重量:2170.0g 石材:砂岩 砥石としては完形。縄文時代の破損した四角を砥石に転用。研磨面は3面。				床土 20cm
	8	鉄製品 鏝	—	全長:(11.8cm) 刃部長:4.0cm 刃部幅:5.1cm 鏝身部幅:0.75cm 鏝身部厚さ:0.55cm 重量:(21.0g) 基部・先端欠損。				床土 3cm
	9	鉄製品 不明	—	全長:(4.2cm) 幅:0.6cm 厚さ:0.2cm 重量:(2.0g) 刀身の基部部分か。				床土 5cm
S102	1	土師器 高台付杯	13.7 4.8 4.6	2/3存、ロクロ成形。体部外面下端回転ヘラケズリ。内面黒色処理。密なヘラミガキ。底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けロクロナデ。	白色粒、黒色粒、 雲母、石英、 白色針状物少	外:にぶい褐色 7.5YR7/4 内:黒色10YR2/1	良好	床土 3cm
	2	土師器 高台付杯	(13.8) (4.0)	1/4存、ロクロ成形。体部外面下端回転ヘラケズリ。内面黒色処理。密なヘラミガキ。底部は回転ヘラケズリ後、高台部貼り付けロクロナデだが、高台部欠損。	白色粒、黒色粒、 雲母、石英、 白色針状物少	外:にぶい黄褐色 10YR7/4 内:黒色10YR1.7/1	普通	床土 2cm
	3	須恵器 杯	(13.2) (4.7)	1/3存、ロクロ成形。	砂粒・白色粒多、 黒色粒、白色針状物少	灰色S5/1	還元 堅焼	床土 3cm

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	出土 位置
S102	4	須恵器 坏	— (2.6) (6.0)	体部下半～底部片、ロクロ成形、底部は手持ちヘラケズリ後ナゲ。	雲母多、白色粒、 チャート少。	外:黄灰色 2.5Y1/1 内:暗灰黄色 2.5Y5/2	未還元	3区
	5	須恵器 高台付坏	(16.6) 7.7 (16.0)	1/3存、ロクロ成形、体部外面下端回転ヘラケズリ、高台部貼り付けロクロナゲ。	砂粒、白色粒、 黒色粒、石英、 雲母、チャート、 白色針状物少	灰色5Y5/1	還元 堅磁	床上 2cm
	6	須恵器 蓋	(14.0) (2.2) —	口縁部片、ロクロ成形、天井部外面上半回転ヘラケズリ。	白色粒、黒色粒、 白色針状物少	灰色5Y5/1	還元 堅磁	—
	7	土師器 甕	(10.0) (4.5) —	口縁～胴上部片、胴部外面器面剥落、内面はナゲ、小型。	砂粒、白色粒多、 雲母	外:にぶい・橙色 5YR6/4 内:灰黄褐色 10YR5/2	不良	1区上層 2区上層
	8	土師器 甕	(22.2) (27.3) —	1/2存、口縁部内外面ともにヨコナゲ、胴部外面上半はヘラケズリ後ナゲ、下半はヘラミガキ、内面はナゲ、外面煤付着。	白色粒多、黒色粒、 雲母、赤褐色粒微	外:にぶい・橙色 7.5YR6/4 内:にぶい・褐色 7.5YR7/4	普通	カマド
	9	土師器 甕	— (20.6) (8.4)	1/5存、胴部外面ナゲ後ヘラミガキ、内面はナゲ、底部木炭痕、外面煤付着。	白色粒、黒色粒、 雲母	外:にぶい・橙色 5YR6/4 内:明赤褐色 5YR5/8	普通	カマド
	1	須恵器 坏	(14.0) 5.1 7.0	1/3存、ロクロ成形、底部回転ヘラ切り。	白色粒、砂粒、 黒色粒、雲母、 白色針状物少	灰黄色2.5Y6/2	還元	振り方
	2	須恵器 坏	(14.0) (4.5) —	口縁～体部下端片、ロクロ成形。	白色粒、黒色粒、 白色針状物少	灰黄色2.5Y6/2	還元	床上 12cm
	3	須恵器 甕	(19.2) (2.0) —	1/5存、ロクロ成形、高台部欠損。	白色粒、砂粒、 黒色粒、白色針状物	灰黄褐色10YR5/2	還元 堅磁	1区上層
4	須恵器 蓋	— (7.2) —	胴部下半～底部1/3存、高台欠損、ロクロ成形、底部は禁止系切り後ナゲ。	黒色粒、白色粒、 砂粒	外:にぶい・黄褐色 7.5YR7/2 内:灰黄色2.5Y6/2	還元 堅磁	床上 18cm	
5	土師器 甕	(19.8) (2.5) —	口縁部片、口唇部外面ヨコナゲ、口縁部ナゲ、内面剥落。	白色粒、砂粒、石英、 雲母多	赤褐色2.5YR4/6	普通	床上 24cm	
S103	土師器 甕	(3.5) (7.0) —	胴部下端～底部片、胴部外面ヘラケズリ、内面ナゲ、下端ヘラナゲ、底部不明な圧痕。	白色粒、砂粒、石英、 雲母多	外:橙色2.5YR6/6 内:にぶい・褐色 5YR6/4	普通	床上 5cm	
	須恵器 甕	(14.0) —	胴部片、胴部外面タタキ、内面ナゲ。	黒色粒多、砂粒、 白色粒	黄灰色2.5Y6/1	還元 堅磁	床上 5cm	
	土製品 紡錘車	—	上面幅:6.0cm 下面幅:2.8cm 厚さ:2.4cm 孔径:0.9cm 重量:76.2g はぼ完形、ヘラケズリ後ナゲ、剥落、褐色付着物(漆カ)。	黒色粒、白色粒、 雲母	褐色5YR6/6	普通	床上 2cm	
	石製品 砥石	—	全長:7.0cm 幅:6.9cm 厚さ:2.8cm 重量:201.2g 石材:砂岩				床上 8cm	
石製品 不明	—	全長:(3.4cm) 幅:(0.8cm) 厚さ:(1.8cm) 重量:(8.2g) 石材:粘板岩				2区上層		
鉄製品 ヘラ状 工具カ	—	全長:7.0cm 幅:2.1cm 厚さ:0.2cm 重量:18.2g 完形カ。					振り方	
鉄製品 錠	—	縦幅:2.6cm 横幅:(4.1cm) 厚さ:0.5cm 重量:(3.4g) 1/2存。					振り方	
S104	1	須恵器 坏	14.2 4.8 8.0	4/5存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切り後ナゲ。	黒色粒、白色粒、 砂粒、白色針状物少	灰白色2.5YR/2	未還元	床上 6cm
	2	須恵器 坏	(13.0) 4.9 8.0	1/2存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切り後ナゲ。	黒色粒、白色粒、 砂粒、白色針状物少	灰色5Y5/1	還元 堅磁	床上 30cm
	3	須恵器 坏	(13.5) 5.0 8.0	1/3存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切り後ナゲ。	白色粒、黒色粒、 砂粒、白色針状物少	灰色5Y6/1	還元 堅磁	床上 6cm
	須恵器 坏	(3.3) 9.0 —	1/4存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切り。	白色粒、黒色粒、 砂粒、白色針状物少	灰色5Y5/1	還元 堅磁	床面	
	須恵器 坏	(17.0) 4.5 (12.7)	1/6存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切りカ。	黒色粒、白色粒、 白色針状物少	灰黄色2.5Y6/2	還元 堅磁	カマド	
	須恵器 高台付坏	11.5 4.6 7.7	2/3存、ロクロ成形、底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けロクロナゲ。	白色粒、黒色粒、 砂粒、白色針状物少	外:灰色5Y6/1 内:にぶい・褐色 7.5YR6/3	還元 堅磁	振り方	
	須恵器 蓋	(4.0) —	1/3存、ロクロ成形、胴部はロクロナゲ、天井部外面上半ヘラケズリ後ナゲ。	白色粒、黒色粒、 砂粒、白色針状物少	灰色5Y6/1	還元 堅磁	床上 45cm	

第3章 小原道跡第22地点の調査成果

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	出土 位置
S104	8	須恵器 高坪	— (3.8)	脚部片, ロク成型, 外面に自然植.	黒色粒多, 白色粒, 砂粒	灰色5Y5/1	還元 堅焼	床上 12cm
	9	土師器 甕	(20.0) (5.6)	口縁~胴部片, 口縁部は内外面ともにヨコナデ, 胴部は 外面はナデ, 内面はヘラナデ.	白色粒, 黒色粒, 砂粒, 石英少, 雲母多	にぶい褐色 7.5YR5/4	普通	床面
	10	須恵器 甕	— (1.9)	底部片, 底部底面は同心円状のタタキ.	白色粒	外: 褐色10YR6/1 内: 褐色10YR4/1	還元 堅焼	2区中層
	11	土師器 甕	— (11.6) (12.0)	胴部下半~底部1.6存, 胴部外面下半はナデ, 下端はヘ ラケズリ, 内面はヘラナデ・工具痕, 単孔.	砂粒多, 白色粒, 黒色粒, 雲母	外: 褐色7.5YR6/6 内: にぶい褐色 7.5YR7/4	普通	床上 11cm
	12	瓦 丸瓦	—	全長: (10.8cm) 幅: (10.7cm) 厚さ: 1.7cm 高さ: 6.6cm 重量: (511.7g) 凸面: 横方向のヘラナデ, 布目圧痕が僅かに残る. 二重内の押印, 文字~ヲ書き. 凹面: 側縁部ヘラケズリ, 布目圧痕, 二重内の押印.	黒色粒, 白色粒, 砂粒	にぶい黄褐色 10YR7/2	還元	床上 6cm
	13	石製品 砥石	—	全長: (10.5cm) 幅: 5.7cm 厚さ: 6.2cm 重量: (457.0g) 石材: 安山岩 二面に砥磨面あり	—	—	—	2区中層
	14	鉄製品 鏝	—	全長: 16.3cm, 刃幅: 2.2cm 厚さ: 身0.25cm 重量: 71.4g 11.6g完形.	—	—	—	床上 3cm

第14表 出土遺物一覧表

種別	遺構名	SI				SB		SK		Pt						表灰	燻乱	合計	
		01	02	03	04	05	01	02	01	02	07	10	13	14	15				
土師器	坏	銅体 破片	2	6	3	6		3										20	
	高台付坏	銅体 破片	1															1	
	甕	銅体 破片																1	
	甕	銅体 破片																1	
	甕	銅体 破片	45	186	133	262	2	32	7	1	1	2			1		42	714	
	甕	銅体 破片																1	
	不明	銅体 破片	4	1		8												13	
	坏	銅体 破片	17	43	28	74		13	1		1			1				188	
	高台付坏	銅体 破片	1	3		4												8	
	甕	銅体 破片	1		2													3	
須恵器	蓋	銅体 破片		3	3	6							1					13	
	高坪	銅体 破片																1	
	甕	銅体 破片	5	7	5	4		3							1			25	
	壺・瓶類	銅体 破片	3		3	2												8	
	丸瓦	銅体 破片				1												1	
	平瓦	銅体 破片				1												2	
	土製品	紡錘車 破片				1												1	
石製品	砥石	銅体 破片	1		1	1												2	
	不明	銅体 破片		1		1												2	
鐵製品	鏝	銅体 破片											1					1	
	刀子	銅体 破片	1															1	
	へラ状工具	銅体 破片				1												1	
	鏝	銅体 破片				1												1	
	鏝	銅体 破片				1												1	
	鏝	銅体 破片				1												1	
近世	陶器	産地不明 破片																3	
合計			81	253	192	375	2	51	8	1	2	2	1	1	1	2	1	48	1021

第4章 東前原遺跡第13地点の調査成果

第1節 調査の概要

奈良・平安時代では、9世紀前半と10世紀前半の竪穴建物跡2軒、土坑3基、ピット50基、近世以降では、17世紀後半～19世紀代の溝跡1条、時期不明の土坑1基が確認された。



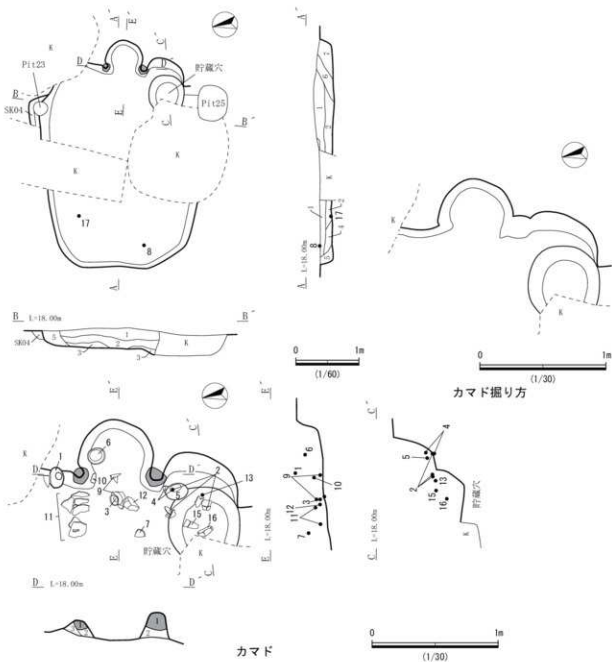
第23図 東前原遺跡第13地点全体図

第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

S101 (第24～26図, 第16・17表, 写真図版7・8・10)

検出位置はC2・3グリッドである。SK04, Pit23・25と重複し, Pit23・25より古く, SK04より新しい。南壁中央から北壁中央にかけて大きく攪乱を受けている。平面形は隅丸方形と考えられ, 主軸方向はN-100°-Eを示す。規模は東西軸が3.25m, 南北軸が2.40m以上, 深さ0.32mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝とピットは検出されなかった。床はローム層を掘り下げたままの床である。カマドは東壁中央に設置され, 袖は灰黄色粘土で構築されている。煙道部は屋外へ0.48m掘り込み, 燃焼部幅は0.50mである。火床の被熱の痕跡は認められなかった。貯蔵穴が南東角に存在し,



第24図 S101

S101 土層説明

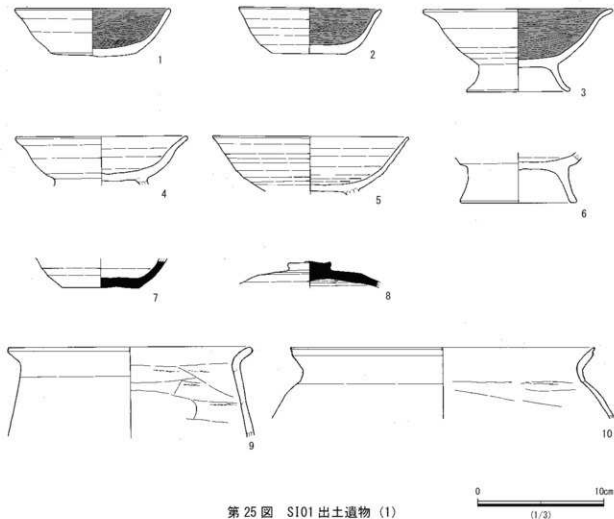
1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。
2. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 15\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性弱。
3. におい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり強。粘性弱。
4. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性弱。
5. におい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性弱。
6. におい黄褐色土 10YR5/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 少量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。カマド。
7. におい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 少量。黄褐色粘土粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。カマド。

カマド土層説明

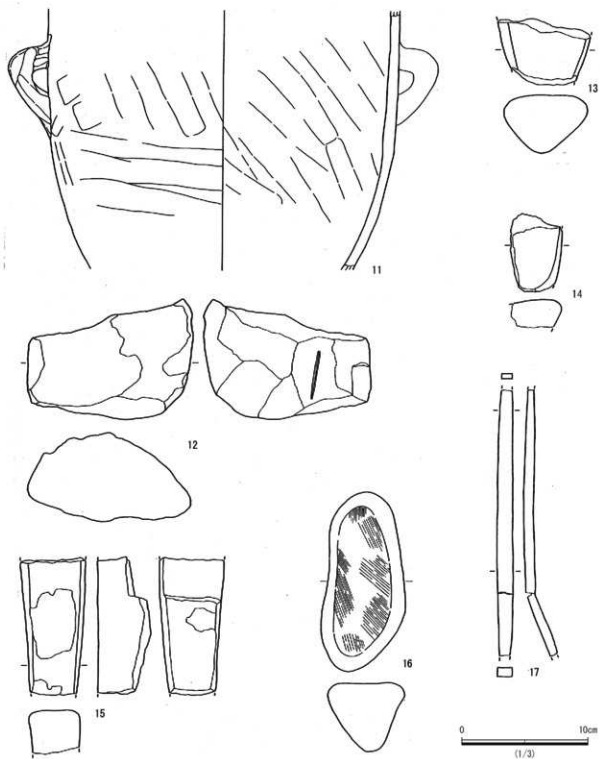
1. 灰黄色粘土 25Y7/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 微量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量。灰黄色粘土粒・ブロック ($\phi 1 \sim 50\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性強。
2. 暗灰黄色土 25Y5/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量。灰黄色粘土粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 多量含む。締まり・粘性強。
3. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 少量。灰黄色粘土粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性やや強。

規模は長軸 0.56 m、短軸 0.52 m 以上、深さ 0.29 m である。この貯蔵穴については、本遺構に伴うものか、近接して存在するピットとの関係を考えて精査を行った。その結果、遺物の出土状況からみても切り合うピットではなく、本遺構に伴う貯蔵穴と判断した。また、貯蔵穴東側の壁は外側へ広がっていることから、本遺構に伴わないピットの壁の一部である可能性も考え、本遺構との重複関係を精査した。その結果、重複関係がみられないことから本遺構の壁と判断した。

遺物は、土師器 102 点、須恵器 34 点、鉄製品は鏝 1 点、石製品は砥石 5 点が出土した。須恵器は供膳具主体である。遺物の出土分布はカマドから貯蔵穴にかけて集中し、貯蔵穴からは砥石 5 点が出土している。時期は出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。



第 25 図 S101 出土遺物 (1)



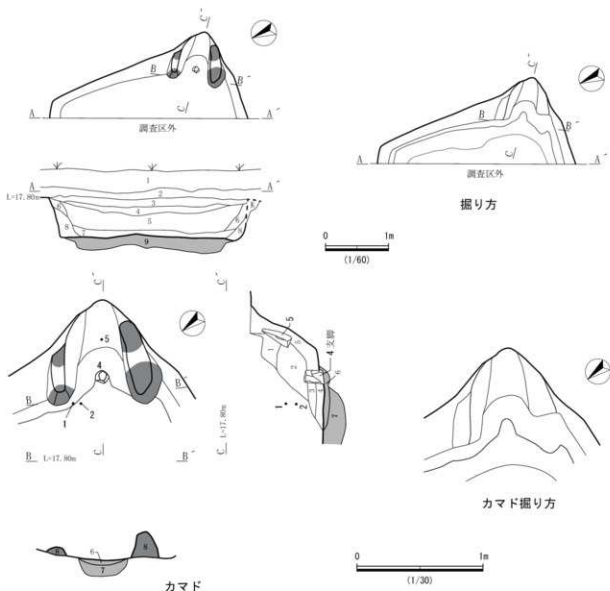
第26図 SI01出土遺物(2)

SI02 (第27・28図, 第16・17表, 写真図版8・10・11)

検出位置はD1・2グリッドである。遺構西側の大部分は調査区外となる。平面形は方形と考えられ、主軸方向はN-120°-Eを示す。規模は東西軸が1.07m以上、南北軸が2.92m、深さ0.58mを測る。覆土は自然堆積である。壁溝と柱穴は検出されなかった。掘り方は粗く掘り下げた後、ロームブロックを多量に含んだ褐色土の貼り床を施し、平坦な床面を構築している。カマドは焚口部が堅穴平面の

対角線上、南東隅の壁に設置された、いわゆる壁隅カマドである。袖は灰黄褐色粘土で構築されている。煙道部は屋外へ0.10 m 掘り込み、燃焼部幅は0.52 m である。火床の被熱の痕跡は認められなかったが、砂岩製の支脚が設置されていた。

遺物は土師器 93 点、須恵器 23 点、石製品では砥石 1 点・支脚 1 点が出土した。時期は、出土遺物から 9 世紀前半と考えられる。



S102 土層説明

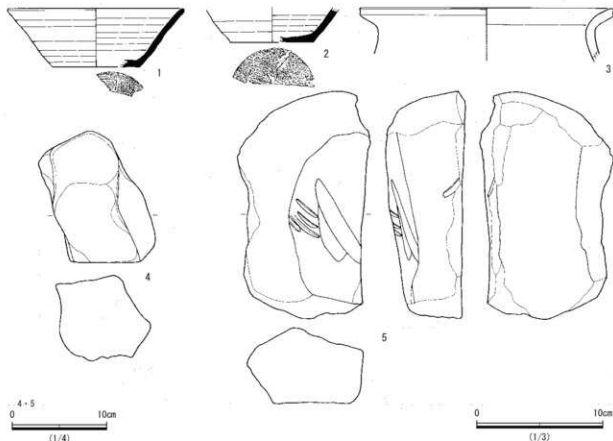
1. 灰黄褐色土 10YR5/2 耕作土・擾乱。
2. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 5\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
3. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性弱。
4. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 少量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性弱。
5. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 微量含む。締まり・粘性強。
6. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 ($\phi 1 \sim 3\text{mm}$) 多量含む。締まり弱。粘性強。
7. にがい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック ($\phi 1 \sim 30\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 微量。黄褐色粘土土 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 少量含む。締まり・粘性強。
8. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 ($\phi 1 \sim 15\text{mm}$) 多量含む。締まり弱。粘性強。
9. 褐色土 10YR4/4 ローム粒・ブロック ($\phi 1 \sim 30\text{mm}$) 多量。焼土粒 ($\phi 1 \sim 15\text{mm}$) 微量。黄褐色粘土土・ブロック ($\phi 1 \sim 30\text{mm}$) 少量。黒褐色粒 ($\phi 1 \sim 10\text{mm}$) 微量含む。締まり強。粘性特に強。掘り方。

第 27 図 S102

第4章 東前原遺跡第13地点の調査成果

カマド土層説明

1. 黄褐色土 25Y5/3 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量含む。締まり・粘性強, 黄褐色粘土主体。
 2. 灰黄褐色土 10YR5/2 ローム粒 (φ1~10mm) 少量, 焼土粒 (φ1~5mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり・粘性強。
 3. 灰黄褐色土 10YR5/2 ローム粒 (φ1~3mm) 微量, 焼土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 中量含む。締まり・粘性弱。
 4. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~5mm) 少量, 焼土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量, 黄褐色粘土粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
 5. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~10mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
 6. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (φ1~10mm) 多量, 焼土粒 (φ1~10mm) 少量, 黄褐色粘土粒 (φ1~15mm) 中量含む。締まり・粘性弱。
- カマド張り方
7. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。張り方。
 8. 黄褐色土 25Y5/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 微量, 黄褐色粘土粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり・粘性強。



第28図 S102出土遺物

(2) 土坑

SK02 (第29図, 図版8・9)

検出位置はF2グリッドである。平面は円形である。規模は直径0.87m、深さ0.19mを測る。覆土はロームブロックを多く含み、埋め戻しと考えられる。遺物は出土していない。時期は覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。



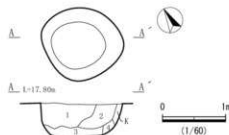
第29図 SK02

SK03 (第30図, 第17表, 図版9)

検出位置はE2グリッドである。平面はほぼ円形である。規模は長軸1.31m, 短軸1.14m, 深さ0.52mを測る。覆土はロームブロックを多く含み, 埋め戻しと考えられる。遺物は土師器3点, 須恵器4点が出土したものの, 細片のため図示できなかった。時期は出土遺物と覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。

SK03 土層説明

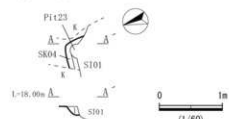
1. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり・粘性弱。
2. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
3. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。
4. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱, 粘性強。



第30図 SK03

SK04 (第31図)

検出位置はC3グリッドである。SI01とPit23と重複し, 本遺構が古い。平面は長方形と考えられる。規模は長軸0.60m以上, 短軸0.30m以上, 深さ0.15mを測る。覆土は自然堆積である。遺物は出土していない。時期は重複関係と覆土の状態から奈良・平安時代と考えられる。



SK04 土層説明

1. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性弱。

第31図 SK04

(3) ビット

Pit01~50 (第15・17表)

ビットは50基確認し, 調査区中央で密に分布している。覆土は黒褐色土が主体である。Pit23・25はSI01(10世紀前半)と重複し, 新田関係はSI01より新しい。このSI01と重複するビットと他のビットは類似するため, 他のビットも10世紀前半より新しい可能性がある。柱痕跡は確認されなかったが, 建物跡になる可能性を考えその復元に努めたものの, 建物跡の把握には至らなかった。遺物は, 12基から土師器・須恵器片が出土したものの, 細片のため図示できなかった。

第15表 ビット一覧表

() は残存値 単位=m

No.	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14
位置	F1・2	E2	E1	E1	E2	D2	D2	D3	C・D3	D2	D2	C2	C2	C2
長軸	0.80	1.00	0.48	0.56	0.75	0.68	0.55	0.40	0.40	0.75	0.50	0.70	0.52	0.56
短軸	(0.55)	0.84	0.44	0.50	0.66	0.60	0.55	0.37	0.31	0.47	0.38	(0.54)	0.40	(0.55)
深さ	0.93	0.58	0.45	0.58	0.65	0.50	0.54	0.36	0.29	0.29	0.21	0.3	0.32	0.58
遺物					有	有	有	有			有	有	有	

No.	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
位置	D2	C2	C2	C2	D2	D2	C2	C2	C3	C3	C3	C3	C2	C2
長軸	0.57	0.42	0.57	0.92	0.68	0.26	0.74	0.38	0.23	0.63	0.58	0.68	0.30	0.42
短軸	0.55	0.40	0.52	0.70	0.52	0.24	(0.45)	(0.28)	0.23	0.55	0.47	0.56	0.25	0.35
深さ	0.42	0.68	0.29	0.35	0.46	0.51	0.57	0.47	0.45	0.29	0.48	0.34	0.32	0.31
遺物	有	有	有	有	有	有	有	有						

No.	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
位置	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C2	C・D3	C3	C・D2	D2	D2
長軸	0.35	0.32	0.28	0.30	(0.25)	0.40	0.80	0.40	0.32	0.38	0.25	0.34	0.40	0.40
短軸	0.30	0.28	0.28	(0.25)	(0.2)	0.32	0.47	0.34	0.30	0.38	0.25	0.30	0.38	(0.30)
深さ	0.40	0.25	0.12	0.19	0.17	0.21	0.17	0.15	0.18	0.25	0.35	0.29	0.20	0.43
遺物														

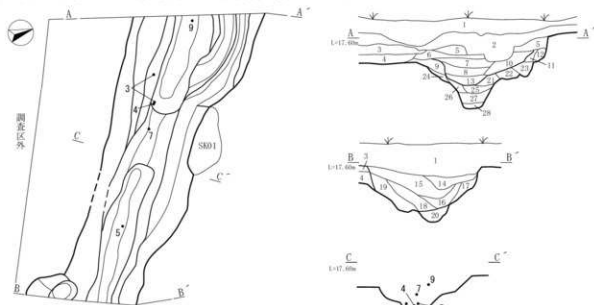
No.	43	44	45	46	47	48	49	50
位置	D2	D2	D2	D2	D2	D2	E2	D2
長軸	0.40	0.41	0.40	0.37	0.28	0.27	0.38	0.40
短軸	0.32	0.37	0.24	0.24	0.25	0.27	(0.25)	0.30
深さ	0.38	0.73	0.49	0.23	0.24	0.40	0.42	0.70
遺物								

第3節 近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

SD01 (第32・33図, 第16・17表, 図版9・11)

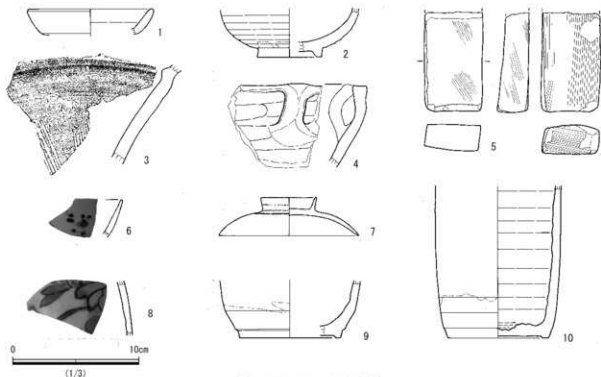
検出位置はE・F1, E・F2グリッドで, 東側が大きく削平を受けている。SK01と重複し, 本遺構が古い。溝は覆土の堆積状況の確認から少なくとも2回掘り直しされており, 長期にわたり使用されていたと考えられる。断面形は下部がU字状で, 上部が皿状を呈する。規模は検出全長が6.70m, 上端幅1.52~2.55m, 下端幅0.13~0.36m, 深さ0.97~1.33mを測る。走行方向はN-58°-Wを示す。覆土は自然堆積である。遺物は中層より上で出土しており, 奈良・平安時代の土師器39点, 須恵器33点, 近世の陶器4点, 磁器3点, 土器18点, 石製品は砥石1点が出土した。時期は出土遺物と覆土の状態から17世紀後半~19世紀代と考えられる。



SD01土層説明

1. 灰黄褐色土 10YR5/2 耕作土・攪乱。
2. 灰黄褐色土 10YR4/2 ローム粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。耕作土・攪乱。
3. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm) 少量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
4. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり・粘性弱。耕作土。
5. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~3mm) 微量。小礫僅か含む。締まり・粘性弱。
6. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
7. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり・粘性弱。
8. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm) 少量。炭化物粒 (φ1~5mm) 覆か含む。締まりやや強。粘性弱。
9. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり・粘性弱。
10. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~15mm) 多量。小礫僅か含む。締まり・粘性弱。
11. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
12. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
13. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり・粘性強。底面やや硬い。
14. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~3mm) 少量。小礫微量含む。締まり・粘性強。
15. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 微量。暗褐色土粒 (φ1~10mm) 微量。小礫僅か含む。締まり・粘性弱。
16. 暗褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~3mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
17. にぶい黄褐色土 10YR5/4 ローム粒・ブロック (φ1~50mm) 多量含む。締まり・粘性弱。
18. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~5mm) 微量含む。締まり弱。粘性強。
19. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・ブロック (φ1~50mm) 多量含む。締まり・粘性やや強。
20. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ブロック (φ1~40mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
21. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~5mm) 少量含む。締まり・粘性弱。
22. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒・ブロック (φ1~40mm) 少量含む。締まり弱。粘性強。
23. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒・ブロック (φ1~30mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
24. 褐色土 10YR4/6 ローム粒 (φ1~10mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
25. 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~15mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
26. 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ1~5mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
27. 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・ブロック (φ1~50mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。
28. にぶい黄褐色土 10YR4/3 ローム粒 (φ1~3mm) 多量含む。締まり弱。粘性強。

第32図 SD01

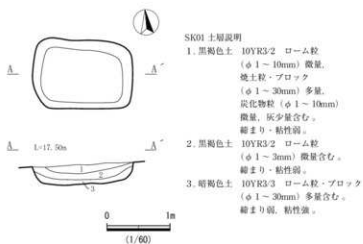


第33図 SD01出土遺物

(2) 土坑

SK01 (第34図, 図版9)

検出位置はE1・2グリッドである。SD01と重複し、本遺構が新しい。平面は長方形である。規模は長軸1.60m、短軸1.08m、深さ0.28mを測る。覆土はロームブロック・焼土ブロックを多く含み、埋め戻しと考えられる。遺物は二次的混入である奈良・平安時代の土師器3点、須恵器1点が出土した。時期は覆土の状態から近世と考えられる。



第34図 SK01

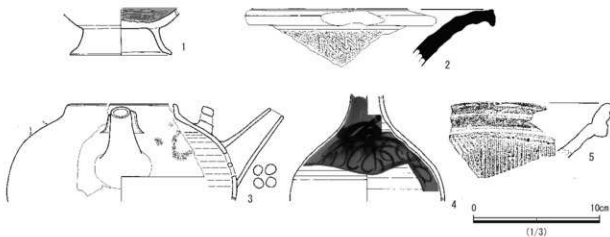
第4節 遺構外出土遺物 (第35図, 第16・17表, 図版11)

SD01に二次的混入の遺物と攪乱から出土した遺物を、遺構外出土遺物として5点掲載した。

1は土師器の高台付坏で内面を黒色処理する。時期は10世紀前半である。2は木葉下窯跡群産と考えられる須恵器甕の口縁部片で、頸部外面に波状文を施す。時期は9世紀代である。以上は平安時代の遺物である。

3は産地不明陶器の土瓶、4は肥前系磁器の染付徳利で胎土が灰白色、5は堺・明石系陶器の挿鉢で、時期は18世紀後半～19世紀前半である。以上は近世の遺物である。(小川)

第4章 東原原道跡第13地点の調査成果



第35図 遺構外出土遺物

第16表 出土遺物観察表

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	出土位置
S101	1	土師器 坏	12.4 3.7 6.7	4/5存。ロクロ成形。内面黒色処理。密なヘラミガキ。底部は回転ヘラ切り。	白色粒・黒色粒少、 雲母微	外:にぶい黄褐色 10YR7/3 内:黒色 7.5YR1.7/1	良好	床上 20cm
	2	土師器 坏	(11.2) 3.6 5.8	2/3存。ロクロ成形。内面黒色処理。密なヘラミガキ。底部は回転ヘラ切り。	白色粒・黒色粒少、 石英微	外:にぶい黄褐色 10YR7/4 内:黒色 10YR1.7/1	良好	床面
	3	土師器 高台付坏	(14.6) 6.5 8.0	2/3存。ロクロ成形。内面黒色処理。密なヘラミガキ。底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けロクロナデ。	白色粒・黒色粒少、 赤褐色粒・雲母微	外:にぶい黄褐色 10YR7/4 内:黒色 10YR1.7/1	良好	床上 2cm
	4	土師器 高台付坏	(13.4) (3.9)	1/2存。高台部欠損。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けナデ。	白色粒、黒色粒多。 雲母、石英微	外:にぶい黄褐色 7.5YR7/4	普通	床面
	5	土師器 高台付坏	15.3 (4.6)	4/5存。高台部欠損。ロクロ成形。底部は回転糸切り後、高台部貼り付けロクロナデ。	白色粒、黒色粒、雲 母	にぶい黄褐色 7.5YR6/4	良好	床面
	6	土師器 高台付坏	(4.0) 9.0	底部へ高台部。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後、高台部貼り付けロクロナデ。	白色粒、黒色粒、砂 粒、雲母	外:にぶい黄褐色 7.5YR7/4 内:にぶい黄褐色 10YR7/4	普通	カマド
	7	須恵器 坏	(2.3) (6.0)	体部下半へ底部片。ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り後ナデ。	白色粒・砂粒多、黒 色粒、雲母微	黄灰色2.5Y5/1	還元	床上 15cm
	8	須恵器 蓋	(2.1)	頸みへ天井部上半片。ロクロ成形。頸みは宝珠形。天井部外面上半へラケズリ。	白色粒、砂粒、黒色 粒、白色針状物微	黄灰色2.5Y6/1	還元 堅焼	床上 17cm
	9	土師器 甕	(19.0) (7.2)	口縁部へ胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面がナデ。内面がヘラナデ。	白色粒、黒色粒、砂 粒、雲母	明赤褐色 2.5YR5/6	普通	カマド
	10	土師器 甕	(23.8) (5.6)	口縁部へ胴部片。口縁部は内外面ともにヨコナデ。胴部は外面がナデ。内面がヘラナデ。	白色粒、黒色粒、砂 粒、雲母	外:にぶい褐色 7.5YR7/4 内:褐色7.5YR4/3	普通	カマド
	11	土師器 甕	(20.4)	1/4存。胴部。胴部外面上半はヘラケズリ後ヘラナデ。下半はヘラケズリ。内面はヘラナデ。把手は指ナデ。	白色粒、黒色粒、砂 粒多、赤褐色粒、雲 母	外:褐色7.5YR6/6 内:にぶい黄褐色 10YR7/4	普通	床上 5cm
	12	石製品 砥石	全長: (9.5cm) 幅: (13.2cm) 厚さ: 8.0cm 重量: (890.2g) 石材: 安山岩 3面に研磨面あり。					床上 4cm
	13	石製品 砥石	全長: (5.2cm) 幅: (7.4cm) 厚さ: 4.4cm 重量: (214.5g) 石材: 安山岩 欠損部以外全面研磨。被熱。					貯蔵穴
	14	石製品 砥石	全長: (6.2cm) 幅: (4.0cm) 厚さ: (2.2cm) 重量: (70.6g) 石材: 安山岩 欠損部以外全面研磨。					3区
	15	石製品 砥石	全長: (16.9cm) 幅: (5.1cm) 厚さ: (3.5cm) 重量: (337.2g) 石材: 泥岩 欠損部以外研磨。					貯蔵穴
	16	石製品 砥石	全長: 14.0cm 幅: 6.7cm 厚さ: 5.4cm 重量: 657.0g 石材: 安山岩 完形。全面研磨。被熱。					貯蔵穴
	17	鉄製品 鏝	全長: (20.9cm) 幅: 1.2cm 厚さ: 0.7cm 重量: (87.8g) 両端欠損。					床上

遺構番号	図面番号	種類 器種	口径 器高 底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	胎土	色調	焼成	出土 位置
S102	1	須恵器 坏	(13.8) 4.6 (7.0)	口縁～底部片, ロクロ成形, 底部は手持ちヘラケズリ, 臍割あり。	白色粒, 黒色粒, 白色針状物	灰黄色2.5Y6/2	還元 灰燻	カマド
	2	須恵器 坏	— (2.8) (6.6)	体部下半～底部片, ロクロ成形, 底部はヘラ切りで, 臍割あり, 外面黒色付着物あり。	白色粒, 黒色粒, 白色針状物	灰色7.5Y6/1	還元 灰燻	カマド
	3	土師器 壺	(19.8) (4.2) —	口縁部片, 口縁部外面はヨコナデ, 内面はナデ。	白色粒, 黒色粒, 雲母, 砂粒多	外: にぶい褐色 7.5Y6/3 内: にぶい褐色 7.5Y8/4	普通	カマド
	4	石製品 支脚	—	全長: 14.9cm 幅: 10.0cm 厚さ: 9.0cm 重量: 1360.0g 石材: 砂岩 面取り, 被熱し劣化。	—	—	—	カマド
	5	石製品 礎石	—	全長: (24.0cm) 幅: (12.3cm) 厚さ: 8.0cm 重量: (3900.0g) 石材: 砂岩 部分的に欠損, 表面研磨。	—	—	—	カマド
SD01	1	土師質 土器 小皿	(10.0) (2.1) —	体部片, ロクロ成形, 17世紀。	金雲母・角閃石カ・ 白色粒・赤褐色粒多量	にぶい褐色 7.5YR7/4	良好	中層
	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	— (3.8) (5.0)	1/3存, 灰釉, 体部下端から底部にかけて露胎。	白色粒多量	オリーブ黄色 7.5Y6/3	普通	中層
	3	瀬戸・美濃 陶器 掻鉢	— (7.8) —	体部片, 内外面鉄釉, 17世紀後半。	白色粒・黒色粒中量, 石英少量	灰赤色2.5YR4/2	良好	底上 33cm
	4	土師質 土器 内耳織	— (6.6) —	耳部片, 耳の断面は楕状, ヨコナデ, 外面煤付着, 17世紀。	石英・雲母・白色粒・ 赤褐色粒多量	黒褐色10YR3/1	普通	底上 35cm
	5	石製品 礎石	—	全長: (7.9cm) 幅: 4.6cm 厚さ: 2.1cm 重量: (146.5g) 石材: 砂岩カ。 1/2以上存, 表面および右側面を良く研磨, 木口及び背面に切断痕が認められる。	—	—	—	底上 48cm
	6	肥前系 磁器 染付碗	— (3.0) —	口縁部片, 梅花文をあしらう。	白色粒・黒色粒中量	灰白色10Y8/1	良好	上層
	7	肥前系 磁器 染付差	(11.0) 3.0 —	1/3存, 狭み及び天井部に3重の圈線を添らす。	白色粒・黒色粒多量	灰白色10Y8/1	良好	底上 52cm
	8	肥前系 磁器 染付徳利	— (4.3) —	体部片, 花文をあしらう。	白色粒・黒色粒中量	灰白色10Y8/1	良好	上層
	9	瀬戸・美濃 陶器 高差	— (4.5) (8.0)	体部下端～底部片, 灰釉, 徳利とも考えたが, 内面の輪の範囲から油漬とした, 体部下端ヘラケズリ, 18世紀前半。	白色粒多量	にぶい黄褐色 10YR7/3	普通	底上 74cm
	10	瀬戸・美濃 陶器 徳利	— (12.0) 8.0	1/3存, 灰釉, 底部回転系切り後体部下端と共にヘラケズリ。	白色粒・黒色粒多量	灰オリーブ色 5Y6/2	良好	上層
遺構外	1	土師器 高台付坏	— (3.6) 8.0	1/3存, 体部下端～高台部, 外面クロコナデ, 内面黒色処理, ヘラミガキ, 底部切り離し後高台貼り付けクロコナデ。	長石・石英・雲母・白色粒多量	外: にぶい黄褐色 10YR6/3 内: 黒褐色 10YR3/1	良好	覆瓦
	2	須恵器 壺	— (4.5) —	口縁部～頭部片, 大甕, 頸部に波状文を施す, 木葉下葉跡群存。	長石・角閃石カ・白色粒・ 白色針状物・黒色粒多量	灰色5Y4/1	還元 灰燻	SD01 中層
	3	産地不明 陶器 土瓶	(8.0) (7.7) —	体部片, 注口は鉄釉で内部の孔は4箇所である, 器壁は薄い。	石英・白色粒・黒色粒多量	胎土: 灰黄褐色 10YR4/2 外: 黒褐色 10YR3/2	普通	覆瓦
	4	肥前系 磁器 染付徳利	— (8.4) —	1/4存, 酒筒形。	白色粒・黒色粒多量	灰白色7.5Y7/1	良好	覆瓦
	5	瀬戸・明石系 陶器 掻鉢	— (4.3) —	口縁部片, 内面密な楕目, 18世紀後半～19世紀前半。	大粒の長石・石英・ 白色粒多量	赤褐色2.5YR4/6	良好	覆瓦

第4章 東前原遺跡第13地点の調査成果

第17表 出土遺物一覧表

種別	遺構名	SI																				表土覆乱	合計			
		01	02	上期中層	01	03	05	06	07	11	12	13	16	17	18	19	20	21	22							
土師器	坏	個体	2																					2		
		破片	8	10		1	1						1											2	8	31
	高台付坏	個体	3																					3		
		破片	1																					1		2
	碗	個体																								
		破片	6																					1		7
	釜	個体																								
		破片	80	83	11	27	3	2	6		1	1	1	1				1	2				8	28	255	
	瓶	個体																						2		
		破片	2																							
	奈良・平安	坏	個体																							
			破片	21	16	10	8		3	1				1		1		1							13	75
		高台付坏	個体																							
			破片	2	1		2								1		1								2	1
壺		個体																								
		破片	1	2	3	1									1									1		9
蓋		個体																								
		破片	5	2				1																	2	10
釜		個体																								
		破片	5	2	5	4	1		1															2	5	25
鉢		個体																								
		破片																							1	1
壺・瓶類		個体																								
		破片																			1					
石製品	砥石	個体	2																				1	3		
		破片	3																					3		
	支脚	個体	1																					1		
-	権	個体																								
		破片	4			1		1																		6
鉄製品	鋳	個体	1																					1		
		破片																								
近畿	瀬戸・美濃陶器	碗	個体																							
			破片				1																			
		搦鉢	個体																							
			破片				1																			
	徳利	個体																								
		破片				1																				
	油差	個体																								
		破片				1																				
	堺・明石系陶器	搦鉢	個体																							
			破片																						1	1
	肥前系磁器	染付碗	個体																							
			破片				1																			
		染付蓋	個体																							
			破片				1																			
染付徳利	個体																									
	破片				1																			1	2	
産地不明陶器	土瓶	個体																								
		破片																						1	1	
土師質土器	皿	個体																								
		破片				6	11																	19	36	
	内耳鍋	個体																								
		破片				1																				1
石製品	砥石	個体																								
		破片				1																				1
合計		146	118	35	63	5	7	9	1	1	3	2	2	2	1	1	1	1	1	2	1	15	81	497		

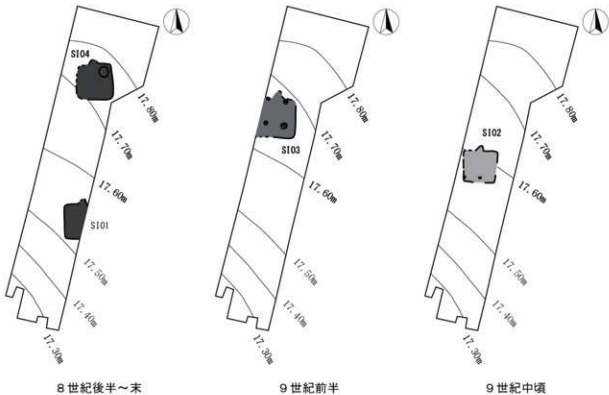
第5章 総括

今回調査した小原遺跡第22地点及び東前原遺跡第13地点の付近では、小原遺跡第19地点と、東前原遺跡第8地点第2次の発掘調査が行われており、遺跡の様相が徐々にではあるが明らかになってきている。これらに基づく遺跡の歴史的評価については将来へと委ねることとし、本章では小原遺跡第22地点と東前原遺跡第13地点での土地利用の変遷を概観し、まとめとしたい。

第1節 小原遺跡第22地点

(1) 土地利用の変遷

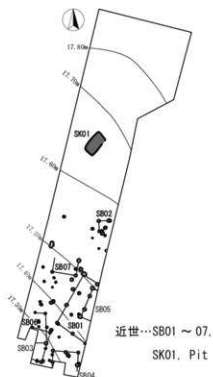
本地点の調査では、奈良・平安時代に帰属する4軒の竪穴建物跡(SI01～04)が確認された。各竪穴建物跡は重複していないが、SI03とSI04との距離は12cmと近接する。一方、SI01とSI04の遺構間は南北に約10m離れている。いずれも北壁にカマドを設置し、主軸方位はほぼ同じである。SI04は北東隅に貯蔵穴を有していた。SI01は約半分が調査区外へと延びているため、貯蔵穴の存在は確認できず、SI04と同形態であるかは不明である。出土物については、SI04の覆土中から、押印とヘラ書きのある丸瓦が出土した。本資料の詳細については後述するが、今回の調査で特筆される資料である。これらの出土遺物をもとに各竪穴建物跡の帰属時期を判断すると、SI01とSI04が8世紀後半～8世紀末、SI03が9世紀前半、SI02が9世紀中頃に比定される。SI03は北壁にカマドを設置し、支柱穴が4基確認されている。本調査で支柱穴が確認された竪穴建物跡はSI03だけである。SI02は北壁中程にカマドを設置し、出入口に伴うと考えられるピット1基が確認されている。



第36図 小原遺跡第22地点 奈良・平安時代遺構変遷図

近世の遺構は、調査区の南側において、覆土が黒褐色土主体の小ピットが多数検出された。このため、小規模な掘立柱建物跡の存在を想定して調査を行っており、小ピットのいくつかでは、柱痕跡が確認された。少なくとも7棟の掘立柱建物跡が存在したとみられる。掘立柱建物跡の主軸方位は、SB06が座標北、座標北に対して東へ5°傾くのがSB04、12°がSB07、19°～30°がSB01・03・05、SB02が西へ6°傾く。傾きからみると、東へ0°～12°と19°～30°、西へ傾くものがあり、大きく3グループに分けることができる。このことは、掘立柱建物跡に時期差があることを示している。遺物はいずれのピットからも近世の出土遺物はないが、遺構の規模と覆土の状態から、時期は近世と判断した。このほかに遺構は、土坑1基（SK01）の検出にとどまっている。

以上のことから、第22地点においては8世紀後半に集落の形成によって人々の土地利用が開始され、9世紀中頃には一旦終焉を迎えるものの、近世に土地利用が再開される。



第37図 小原遺跡第22地点
近世遺構図

(2) SI04 出土の文字瓦

8世紀後半～末に比定されたSI04の床面直上から出土した丸瓦片の凸面に、焼成前にヘラ状工具により記された文字が認められた。ヘラ書きは「□(鳥カ)取部半フワカ」の6文字であろうか。また、二重円の押印が1か所あり、同じ押印が凹面にも1か所認められる。この押印は、類例から「禾(アワ)」と識別され、常陸国那賀郡阿波郷を示すものと理解される。

同様の押印は、本遺跡の近隣に所在する大串遺跡第7地点で木本孝周氏が採集された。両面に糸切痕が残る平瓦の凸面にも確認されている。その平瓦には「占部色万」のヘラ書きと二重円内に「禾」の印が押されており、8世紀第2四半期の所産とされる(木本 2008)。

木本氏が報告した資料は、SI04の文字瓦より時的に先行するが、SI04の文字瓦は二次的に利用された可能性もあることから、大串遺跡第7地点の製品と近い時期に生産されたものとも考えることもできる。また、二重円の中に「禾(アワ)」の文字が押された文字瓦は、市内に所在する堀遺跡第9地点のSI01や台渡里官衙遺跡長者山地区SB001からも出土しており(高井 1964、小川・大淵編 2008、



縮尺：1/1

第38図 小原遺跡第22地点 SI04 出土文字瓦写真

川口・渥美・木本 2009), 掘遺跡第9地点 SI01の資料は8世紀第3四半期以前, 台渡里官街遺跡長者山地区 SB001の資料は郷里名を記録する文字瓦(凸面に糸切り痕を持つ平瓦, 有段式丸瓦)の存在から, 多賀城府跡I B期の開始期である神亀元年(724)から郷里制施行終焉年代の天平12年(740)の16年間の所産と考えられている(川口 2011)。

小原遺跡は大串遺跡第7地点まで1.5kmと近いことから, 大串遺跡第7地点で確認されている瓦倉の屋瓦として葺かれたものが再利用されたと考えておくのが妥当であろう。

第2節 東原遺跡第13地点

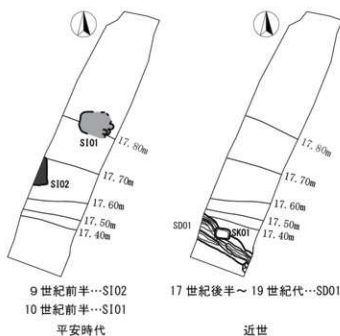
土地利用の変遷

本地点の調査では平安時代に帰属する2軒の竪穴建物跡(SI01・02)が確認された。竪穴建物跡間の距離は約5mである。SI01はカマドを東壁中央に設置し, SI02は南東隅に設置された, いわゆる壁隅カマドである。出土遺物からSI01は10世紀前半, SI02は9世紀前半に比定された。SI01から北側へ約10mの間には遺構が存在せず, 本地点北側に隣接する第8地点第2次調査で, 奈良・平安時代の竪穴建物跡6軒, 土坑2基, ビットが発掘調査により確認されており(橋本・小川ほか 2016), 8世紀中葉から9世紀後葉へと推移していくにつれ, 竪穴建物跡の床面積の規模が縮小していく傾向や9世紀後葉には竪穴建物跡の構築がみられないことが明らかとなっている。なお, 第13地点の南側で実施された道路建設予定地(第15地点)の試掘調査では, 遺構が検出されず, 第13地点のSI02より南側では奈良・平安時代の遺構の存在が希薄になることが明らかとなった。

今回調査された竪穴建物跡で注目されるのは, SI02のカマド構造である。本遺構は焚口部が竪穴平面の対角線上に位置しており, 県下の資料の分析(木村ほか 2017)によると, 両袖タイプ第I a類に分類されるものである。またこの構造は「仏教と密接な関係を結んだ個人もしくは集団の居住や修行に関連した建物の一つとして考えておきたい」(駒澤 2018)とされるが, SI02からそうした見解を裏付ける資料や仏教関連遺物は出土していない。

この後, 本地点での土地利用が再開されるのは, 10世紀前半から700年も時を隔てた17世紀後半の江戸時代になってからである。SD01は出土遺物から17世紀後半～19世紀代に機能したと考えられる近世の溝跡である。溝跡の南側で耕作に伴うローム層の削平が北側に比べ深くなっていることから, 畑地との境界を示す区画の用途を担っていたと考えられ, 調査地は耕地として利用された可能性が高い。

以上, 限られた範囲の調査ではあったが, 古代と近世の土地利用の変遷が見えてきた。ただし, 小原遺跡, 東原遺跡の発掘調査は現在も進行中であり, 各地点で検出されている遺構の年代的位置づけがなされて, はじめて両遺跡内に展開した土地利用



第39図 東原遺跡第13地点遺構変遷図

第5章 総括

の詳細な変遷や性格の推移について言及できるのである。そのためにも今般の調査のように狭小な面積であったとしても、発掘調査を実施することに意義があり、本報告がその一助となれば幸いである。

(小川)

引用・参考文献

- 秋元吉郎校注 1958 「常陸国風土記」『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店
- 浅井哲也 1990-1993 「茨城県内における奈良・平安時代土器 (I・II)」『研究ノート』創刊号・2号 (財)茨城県教育財団
- 伊東重敏 1976 「六天古墳 (森戸古墳群第12号墳)」茨城県茨城郡常道村教育委員会
- 井上義安 1985 「水戸市下細道跡 市道酒門8号線掘削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 1994 「水戸市大串道跡 市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
- 1998 「伊豆原教路確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 「水戸市大串道跡 常道中学校校庭改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 「水戸市北城教古墳 市道常澄7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
- 太田有里乃・柴井千佳・土生朗治 2015 「小原道跡 (第3地点) 都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 小川和博・大沼淳志博 2008 「堀道跡 (第9地点) 一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—1」水戸市教育委員会
- 小川和博・大沼淳志・川口武彦・木本孝周・榎美賢吾・関口慶久・株式会社京都科学 2008 「大串道跡 (第7地点) 一介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 小野麻人・鈴木裕子・米川暢歌・丸山優香里 2016 「東前原道跡 (第8地点第4次) 区画道路6-27号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 櫻村宣行 1995 「一般国道6号東水戸道路改良工事内埋蔵文化財調査報告書II 堀内道跡」財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の埴形尖頭器」『發見岐考古』第27号 發見岐考古同人会
- 2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の埴形尖頭器」『發見岐考古』第30号 發見岐考古同人会
- 2011 「常陸国の多賀城系瓦からみた陸奥国との交流—那賀郡御正倉院・正倉別院出土瓦を中心として—」『古代社会と地域間交流Ⅱ—寺院・官衙・瓦からみた関東と東北—』六一書房
- 川口武彦・榎美賢吾・木本孝周 2009 「台湾里1—平成18年度長倉山地区範囲確認調査概報—」水戸市教育委員会
- 川口武彦・小川和博・大沼淳志 2002 「水戸市元石川町所在 小仲根道跡発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 川崎純徳・吹野富美夫 1986 「大串貝塚」常道村教育委員会
- 河野一也・萩原宏幸・昆志徳・米川暢歌 2017 「東前原道跡 (第8地点第7次) 区画道路6-22号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 木村光輝・駒澤悦郎・中泉雄太・長西正博 2015 「茨城県内における壱瀨川の壑穴建物について」『埋蔵文化財』年報34 (公財)茨城県教育財団
- 木村光輝・駒澤悦郎・長西正博 2017 「茨城県内における壱瀨川の壑穴建物について (2)」『研究ノート』第14号 (公財)茨城県教育財団
- 木本孝周 2008 「水戸市大串道跡第7地点出土瓦の検討」『帝塚山大学大学院人文科学研究紀要—発掘10周年記念号—』第10号 帝塚山大学大学院人文科学研究紀要編集委員会
- 駒澤悦郎 2018 「茨城県内における壱瀨川の壑穴建物について (3)」『研究ノート』第15号 (公財)茨城県教育財団
- 齋藤 洋・米川暢歌 2016 「小原道跡 (第16地点) 都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 高井梯三郎 1964 「常陸台里里寺跡・下総結城八幡瓦窯跡」茨城県教育委員会
- 高野浩之・米川暢歌・丸山優香里 2017 「東前原道跡 (第8地点第8次) 耐震性的水槽設置及び擁壁設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 常道村史編纂委員会 1989 「常道村史」
- 中山信名 1979 「新編常陸国誌」宮崎報社会
- 横本藤雄・小川和博・大沼淳志ほか 2016 「東前原道跡 (第8地点第2次) 区画道路6-22号外1路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 岡宮正光・米川暢歌 2015 「堀道跡 (第4地点) 一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—1」水戸市教育委員会
- 水野順敏・米川暢歌・丸山優香里 2017 「東前原道跡 (第10地点) 区画道路6-33号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 水戸市教育委員会 1999 「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 (平成10年度版)」
- 米川暢歌・太田有里乃・小川和博・大沼淳志ほか 2015 「東前原道跡 (第3地点第2次) 区画道路6-17号線外2路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 米川暢歌・太田有里乃・谷 旬ほか 2016 「東前原道跡 (第8地点第5次) 一東前第二地区内整理事業造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 米川暢歌・高野浩之・丸山優香里・昆 志徳 2016 「東前原道跡 (第7地点第2次) 区画道路10-2号線道路改良 (その3) 及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 米川暢歌・丸山優香里・高野浩之 2016 「東前原道跡 (第8地点第3次) 一区画道路10-2号線道路改良 (その1) 及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会

写 真 图 版



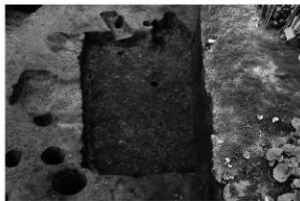
調査区全景 (1) (南から)



調査区全景 (2) (北から)



基本層序 (北から)



S101 全景 (南から)



同 カマド土層断面 (南西から)



同 遺物出土状況 (南から)



同 No. 8 鉄鍬出土状況近景 (西から)



S102 全景 (南から)



同 カマド遺物出土状況 (南から)



同 カマド土層断面 (南東から)



S102 遺物出土状況 (南から)



S103 全景 (南から)



同 土層断面 (南東から)



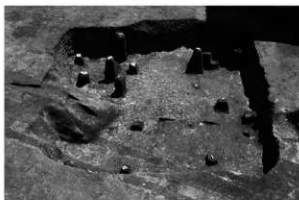
同 No. 8 土製品 (紡錘車) 出土状況近景 (南西から)



S104 全景 (西から)



同 土層断面 (南東から)



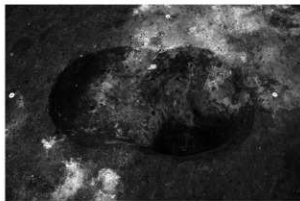
同 遺物出土状況 (西から)



同 No. 12 文字瓦出土状況近景 (北東から)



S104 No. 14 鉄製品(鎌)出土状況近景 (西から)



SK02 全景 (南西から)



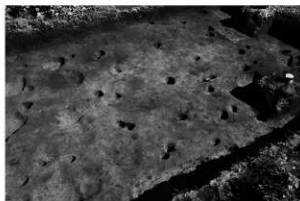
SK03 全景 (南から)



同 土層断面 (南から)



SB01・05・07 全景 (西から)



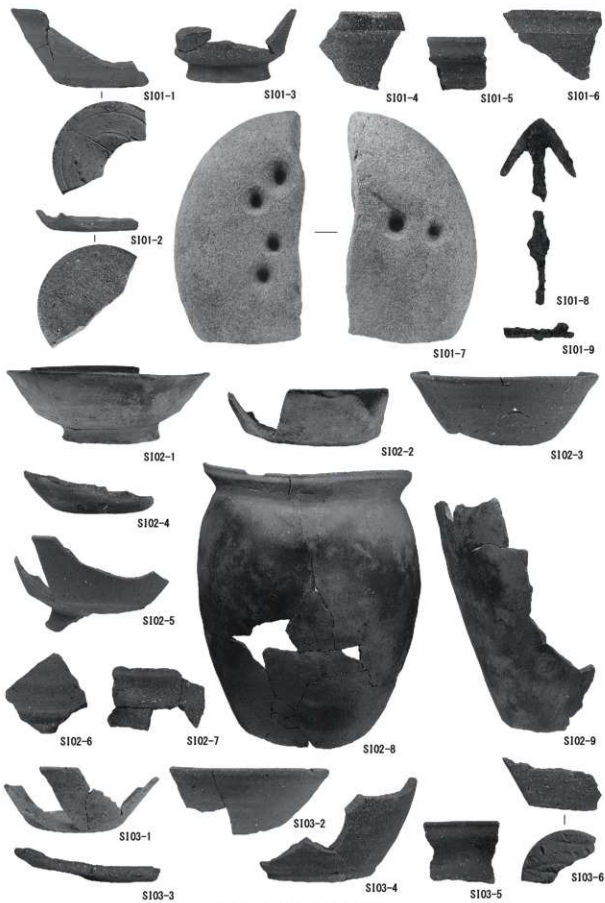
SB03・04・06 全景 (北西から)



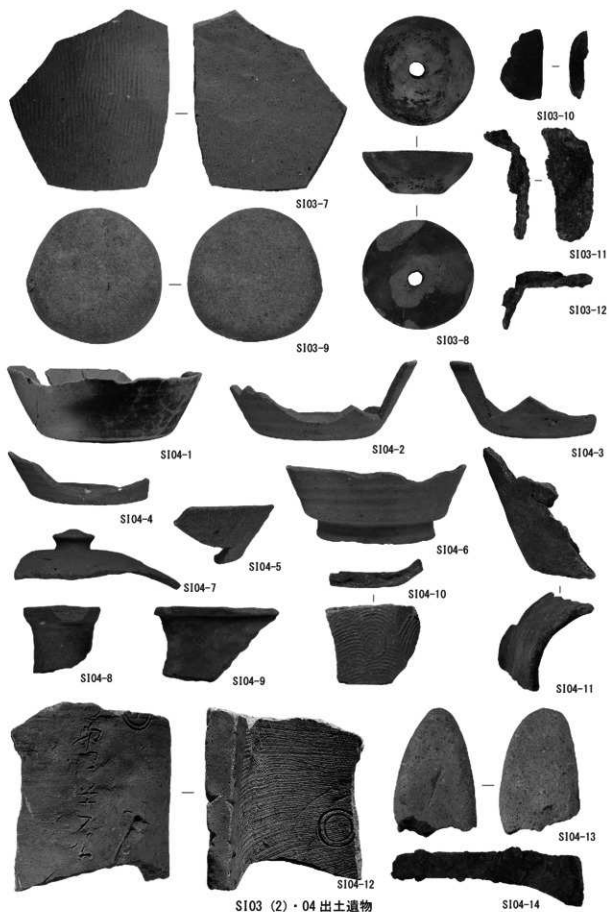
SK01 全景 (北西から)



同 土層断面 (北西から)



S101・02・03 (1) 出土遺物



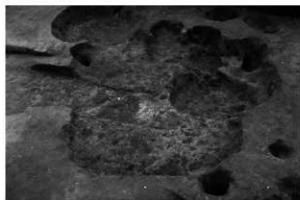
S103 (2) · 04 出土遺物



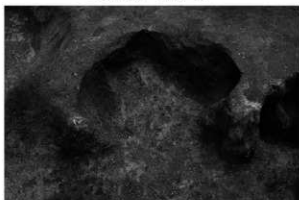
調査区全景 (南西から)



基本層序 (西から)



S101 全景 (西から)



同 カマド近景 (西から)



同 土層断面 (南から)



S101 遺物出土状況 (西から)



同 遺物出土状況近景 (西から)



S102 全景 (南から)



同 カマド近景 (西から)



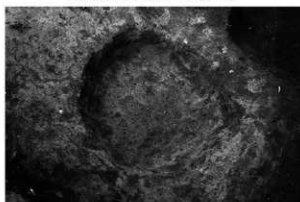
同 土層断面 (南東から)



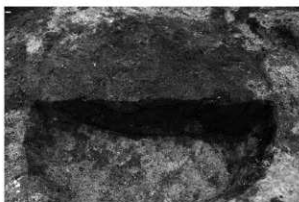
同 遺物出土状況 (東から)



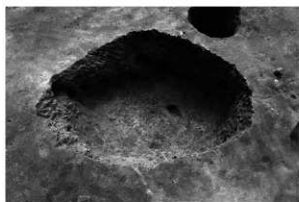
同 カマド掘り方近景 (西から)



SK02 全景 (南から)



SK02 土層断面 (北西から)



SK03 全景 (北東から)



同 土層断面 (南から)



SD01 全景 (南西から)



同 土層断面 (1) (南東から)



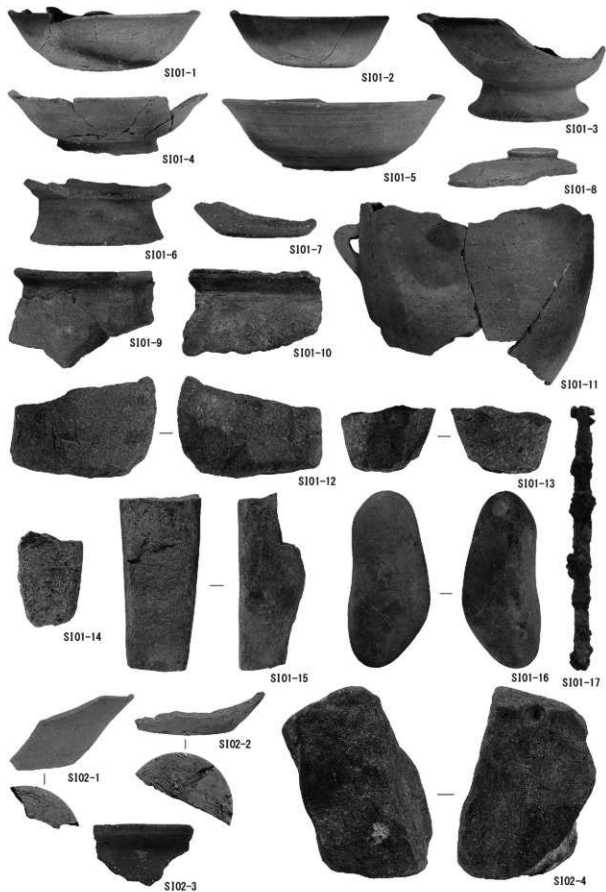
同 土層断面 (2) (北西から)



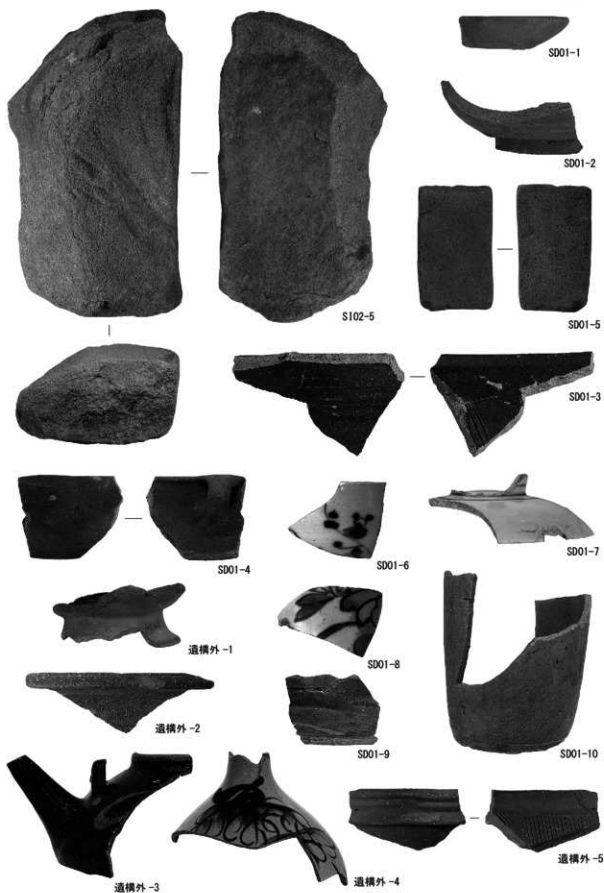
同 遺物出土状況 (南から)



SK01 全景 (北から)



S101・02 (1) 出土遺物



S102 (2), SD01, 遺構外出土遺物

抄録

ふりがな	こはらいせき だいにじゅうにちてん とうまえばらいせき だいにじゅうさんちてん						
書名	小原遺跡 (第22地点) 東前原遺跡 (第13地点)						
副書名	区画道路6-38号外3路線道路改良及び造成並びに流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第96集						
編著者名	米川暢敬 小川将之						
編集機関	株式会社地域文化財研究所 〒270-1327 千葉県印西市大森2596-9 TEL 0476-42-7820						
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5 TEL 029-306-8132 (担当) 教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター 〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1大車貝塚ふれあい公園内 TEL 029-269-5090						
発行年月日	2018年3月30日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		
こはらいせき 小原遺跡	茨城県水戸市東前町 1072-1はか	08201	183	36° 20° 18°	140° 31° 37°	20170731 ～ 20170817	232.5㎡ 区画整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
小原遺跡 (第22地点)	集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物跡 4軒 土坑 2基 ピット 16基	土師器：坏・甕・瓶 須恵器：坏・蓋・甕 壺 瓦：丸瓦・平瓦 石製品：砥石 鉄製品：鉄鏃		8世紀後半～末の竪穴建物跡から出土した丸瓦片の両面に「禾(アワ)」の押印があり、凸面には文字がへら書きされていた。	
		近世	掘立柱建物跡 7棟 土坑 1基 ピット 33基				
要約	8世紀後半～9世紀中頃の竪穴建物跡4軒はカマドを北壁に設置する。掘立柱建物跡7棟は、近世の可能性が高いと判断された。						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		
とうまえばらいせき 東前原遺跡	茨城県水戸市東前町 1103-1はか	08201	259	36° 20° 24°	140° 31° 42°	20170818 ～ 20170830	163㎡ 区画整理事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
東前原遺跡 (第13地点)	集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物跡 2軒 土坑 3基 ピット 50基	土師器：坏・甕・瓶 須恵器：坏・蓋・甕 石製品：砥石 鉄製品：壺		9世紀前半の竪穴建物跡のカマドは、いわゆる壘隅カマドであった。	
		近世以降	溝跡 1条 土坑 1基	陶磁器：碗・搦鉢・徳利・土版			
要約	9世紀前半(S102)と10世紀前半(S101)の竪穴建物跡2軒が検出され、S101はカマドを東壁に設置し、S102はカマドを竪穴平面の対角線上、南東隅に設置する。溝跡1条は掘り直されており、17世紀後半～19世紀代のものと考えられる。						

水戸市埋蔵文化財調査報告第96集

小 原 遺 跡

(第22地点)

東 前 原 遺 跡

(第13地点)

区画道路6-38号外3路線道路改良及び造成並びに
流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成30年3月22日 印刷

平成30年3月30日 発行

編 集 株式会社 地域文化財研究所

発 行 水戸市教育委員会

印 刷 株式会社 ライフ TEL 0476-24-1564
